

針葉樹会報

1997. 7. 第84号



発行日 1997年7月25日	針葉樹会報 第84号	編集人
発行所 針葉樹会		〒121 東京都足立区島根 2-32-19-405
印刷所 篠田印刷		稲毛 尚之



針葉樹会報 第84号

目 次

岩崎利一さんを追悼して	柿原謙一	1
岩崎さんの思い出	佐々木誠	2
岩崎利一先輩へ	石原脩	3
ヤンゴン(ミャンマー)で日本語学校開校	横山皖一	4
アメリカの山のことなど	佐 雍 恭	6
大学院生として考えること	上原利夫	10
Piz Paul に登って	石 弘 光	11
お正月の山——加賀白山	倉 知 敬	14
丹沢 寄(やどろぎ)小屋の収束	三 森 茂 充	18
香港山暮らし	金 子 晴 彦	19
「世界百名山」の選定に関わって	中 島 寛	27
会員集会短報		34
編集後記		34

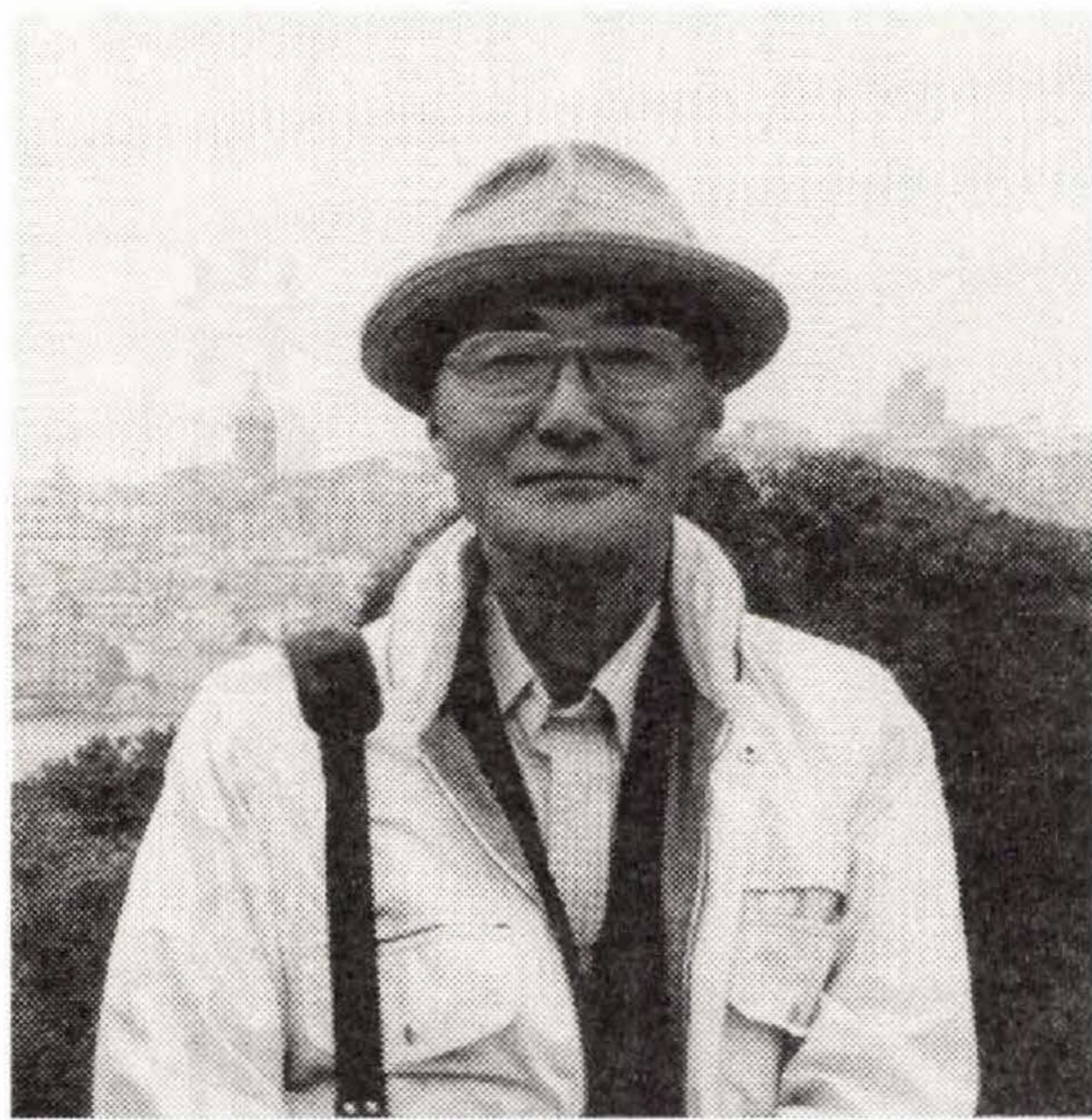
表紙写真説明 海子山 5820メートル

四川省北西部、チベット高原の東の端に位置する。チベットに“Ja-ra”（山々の王）と呼ばれた秀峰である。写真はその北面、いまだに未踏である。

岩崎利一さんを追悼して

柿原謙一（昭一二）

賀状に「方丈記の心情をおもふことしきりです。」と書かれた岩崎利一さんが、三月十四日深夜御他界されたと、御息女九鬼悦子さんから、電話をうけた。山岳部員時代からの山友であり、ともに田部重治さんの登山態度に同感しつつ登山し、また長男や長女の結婚問題でも、ひとか



岩崎さん 近影トルコトプカブ宮殿で 1996 9月

たならず御協力をうけてきた私は、岩崎さんの長い友情に対し謹んで御冥福を祈るばかりです。

岩崎さんのお店は銀座の老舗であり、その小中学校をへて東京商大（一橋大）へ入学された。大学へ残るお気持ちが強かったようであったが、結局老舗の営業に専念された。一流の店舗がズラリと並んでいる銀座で、岩崎さんは経営者たちの連絡や会議でも、指導的立場の一人であられた、と私は思う。

私をはじめ岩崎さんと登った山は、一九三四年十一月の奥秩父の十文字峠越えであり、森川真三郎君を加えた三人の山行だった。上野駅から小諸経由で、大文字小舎に一泊し、寒いので焚き火を焚きとおした。翌日栃本に一泊して上野駅へ。

翌一九三五年五月新入部員歓迎登山行では、岩崎さんは不参加だったが、日江井正己・大塚武さんたち七名の新入部員がいた。同六月の三ッ

峠岩登練習の折は岩崎利一・大塚武君も同行した。

同年十月十一月の鳳凰山地蔵岳登山の折、地藏岳オペリスク登攀に際し、森川君がスリップしたので、一行は北小室小舎経由で葦崎町に下山した。同行者の十名の中に、林俊介・大塚武・日江井正己君がいた。この遭難事件の前後から、山岳部の中は田部重治さんの登山態度とヨーロッパ的登山態度の二つの傾向を進むように分岐したと、私は思っている。前者を林俊介、後者を大塚武が代表していたものと、私は感じていた。

現在の一橋大山岳部員にも、この二つの登山態度が受けつがれているでしょう、と思う。私は田部重治先輩の登山態度を尊重する一人ですが、ヨーロッパ的近代登山でエベレストを目指す方向を否定する考はもってはおりません。この登山態度こそ、世界史的登山の主流であり、若い登山者がこの道を辿ることは、世界史登山の主流であるからです。

ただ私は、田部重治さんの登山態度に共鳴して、その中に岩崎さんもいるのだと信じ、八十才になる私の人生をふり返って、安心していきます。

岩崎さんの思い出

佐々木 誠（昭一四）

三月十六日、蔵王スキー行の準備をしている処に、お宅からの電話で岩崎さんが十四日に急逝の知らせを受けた。針葉樹会新年会の折、隣りの席で、昨秋ご夫妻で行かれたトルコ旅行の話など、杯を重ねながら歓談したばかりなので、信じられぬ思いで取り敢えず銀座のお宅にお悔やみにうかがった。ご遺体はすでに根岸のお寺の方に移されており、最後のお別れをせずに出掛けるのはいささかためらいがあったが、むしろ元気な姿のイメージをそのままにし、岩崎さんの追悼スキーに切りかえて、翌朝の新幹線登山形に向かった。

蔵王では岩崎さんのご加護か、連日好天に恵まれて、飯豊、朝日、月山から、はるか鳥海山まで、嘗つてない眺望をほしのままにした。

六十年前の同じ三月に、岩崎さんが周到なプランで、戦死した原鉄三郎さんとふたりで鳥海山に登られた事を想い出す。当時部の行動は穂

高や北岳の周辺が多かったが、東北の山にも目を向けた、一味違った山行だったと思う。岩崎さんご自身も、山歴の中で快心の山の一つではなかったらうか。

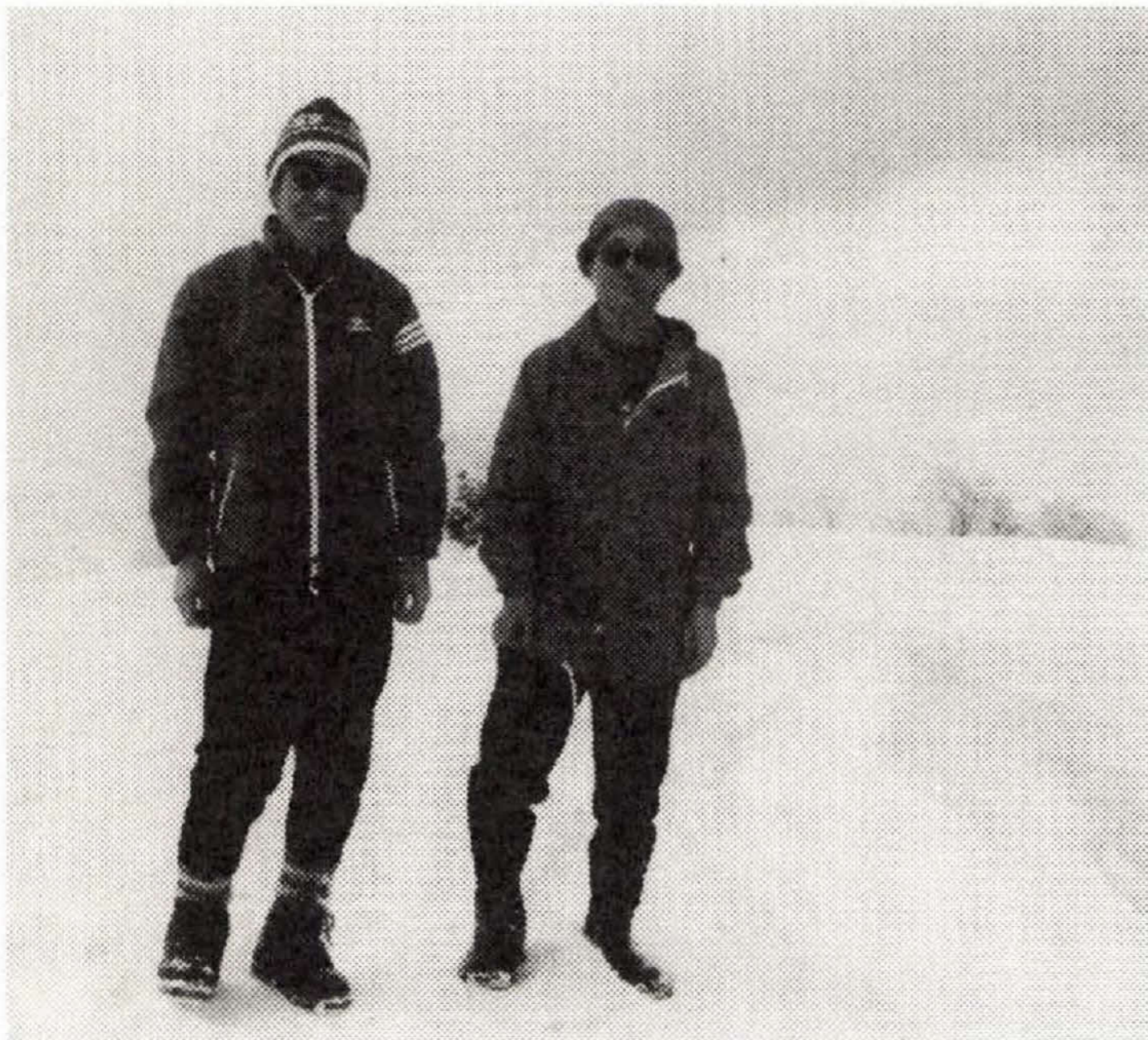
三日間存分に眺望と滑降を楽しんで帰京し、早速お宅にうかがって温顔の遺影に額づき、蔵王の報告と永年のご交誼を謝した。

ご家族から岩崎さんの出征中にお母様が疎開しておいた古いアルバムを見せていただいた。私は古い写真のすべてを戦災で失っているので大変な貴重品だ。とりわけ大塚さんにとってもらった乗鞍山頂のスナップ、私がとったベスト半切の白峰三山縦走の折の数葉はまことに懐かしく、備え付けの専用ルーペで若き日の岩崎さんを拡大して眺めた。

すべてスロースタートの私は、スキーをはじめたのが予科三年の十二月、美津濃で六円のイタヤのスキーを新調して乗鞍合宿に参加した。

乗鞍スキー小屋まで、度々シールが外れたりして難波のみちのりだったが、岩崎さんが相前後して終始面倒を見てくれた。乗鞍の頂上へは岩崎さん大塚さんと三人で登ったが、スキーの方はなかなか思うにまかせず、小谷部さんの豪快なクリスチャニアを羨望の眼でながめるのみであった。

年が明けて、岩崎さんに頼み、岩原と赤城山で岩崎さんのオーソドックスなシュテムボーゲンをトレースする特訓を受けたので、つづく三月の野沢温泉合宿では何とか皆さんについて行けるようになった。この時も毛無山へは、岩崎さん原さん大塚さんらと同行した。



昭和52年3月 毛無山で 右 岩崎さん

戦後長いプランクのあとに、山とスキーを再

開した私は、岩崎さんを誘って改装直前のさかや旅館に泊まり、再び毛無山にのぼった。リフトを乗りついでいとも簡単に頂上を往復したが、にぎり飯持参ではぼ一日がかりだった昔がうそのようであった。しかしこれも既に二十年前のこと、野沢の街並みにまだ昔の風情が残っていた。

岩崎さんとの山行では、昭和十三年五月の白峰三山縦走が最も印象にのこる。腐雪の登りに意外に時間を食い、吊尾根の二九五〇米地点で、這松の中に埋もれて一夜を明かした。翌朝の景観の美しかったこと、今なお鮮明に脳裏によみがえる。野営は何故か想い出をより深いものに

する。

古いアルバムの外に、岩崎さんの手帳に記された句も見せていただいたので、その中の幾つかを附記させていただく。

年が明けてから急逝まで、平穩に過ごされた日々が偲ばれる。心からご冥福を祈る。

年の瀬に福茶をのんで越しにけり
臘梅を透して見ゆる武甲山（宝登山にて）

正月や半七を讀む酔い心地

都幾川の堤の道や芝枯るる

冬の朝みゆき通りの陽差しかな

有難や熱き牛乳春立ちぬ

浜離宮波止場に続く梅林

梅散って紅白木瓜に代りけり

岩崎利一先輩へ

石原 脩（昭三〇）

岩崎先輩。私が追悼文を書くことなど考えも

及ばなかったのですが船本文治先輩の体調が悪

いことをお聞きして、急に筆をとりました。

昨日（四月十日）。会報担当の中村保君の依

頼を受け、船本さんに執筆をお願いしたところ

「岩崎君の追悼文は、自分こそが書かねばならぬと思う。しかし、今日、家内の病院の移転をした。資料もないし、今、自分も臥せっていて書ける状態にない。岩崎君も判ってくれるだろう。」とのことでした。

岩崎先輩。二年前の一月十七日朝の阪神大震災で、神戸市東灘区の船本宅が被災した直後、二月一日付で私宛に葉書を送ったことを憶えておいででしょうか。

「拝啓 昨夜は針葉樹会新年会で大変お世話になりました。

吉沢さんも見え、遠征計画の発表もあり、有意義な集まりでした。

扱て、船本文治君の避勤先は左記の通りで彼自身は元気です。（娘さん宅）

兵庫県川辺郡猪名川町松尾台二丁目

二一四八一四〇一 沢田方

TEL 〇七二七一六六一八三八二

この葉書のお陰で、今回も直ちに船本さんと連絡をとることが出来ました。

さらにその後四月二十四日付の船本さんの葉書のコピーを付したお手紙で、船本宅は尾根瓦の被害程度だったが、天井からの落下物で奥様が胸を打たれたことを心配しておいででした。

針葉樹誌上で顧りみますと、先輩の同期は、船本さん・原鉄三郎さんの三人ですが、昭和十

九年に原さんが東支那海で戦死との報を受けてよりは、五十三年間、二人きりの同期の桜で過ごしてこられました。

私ごとになりますが、旧制中学から新制高校までの六年間で、私には四人の山仲間がおりましたが、一の倉と苗場で二人、その後病気で二人失いました。OB会で特に野球部などのにぎやかな連中に囲まれますと、特に寂しく、船本さんのご心中も察せられます。

岩崎先輩。本科から山岳部に加わった船本さんと二人だけの山行が針葉樹十号にありました。



昭和10年12月 葉鞍岳頂上で 右 岩崎さん

船本さんの弔意が万分の一でも届くよう、この会報に再掲させて頂きます。

鹿島槍ヶ岳

岩崎利一、船本文治

昭和十二年

一〇・七 曇後晴

築場(八・〇〇)―黒沢峠―冷澤小屋―二

俣―冷池小屋(四・四五)

白銀に装われた東尾根の岩峰を仰ぎつつ、

綿繻をまとえる黒澤峠に小憩。落葉に積もる

新雪を踏んで赤岩尾根を登る。

一〇・八 雪

小屋より槍往復

キレット小舎に入る予定で出発したが、黒部より吹き寄せる横なぐりの吹雪激しく、遂に引き返す。

一〇・九 快晴

小舎(九・一五)―槍頂上(九・五〇)―

爺岳―種池―扇沢小屋(四・四五)―大町

(八・一〇)

蒼穹の下快晴に恵まれ再び槍に登る。帰途扇沢出合付近で道を失い、澤通し下った。

ヤンゴン(ミャンマー)で日本語学校開校

横山 皖一(昭二十七)

一九九六年十月二日にヤンゴンにおいて、横山日本語学校を開校し、二十四名の学生にて十月〜十二月の夕方コース(五・三〇〜七・二〇pm)の授業を始めました。年齢は二〇歳の前

半が多く、最年長は三十四歳。当初は小生の到着する九月一日までに家の改装も終わり、テナントは引っ越しているとの話でしたが、その連絡が悪く、七月の満月から九月の満月まで仏教

徒は引越しが出来ないことになっているので
す。

住居を含む学校となる建物は小生の世話になっ
ている永野氏のミャンマー人の奥さん（キリス
ト教徒）の持ち家ですが、こんなところにも行
き違いがあったようです。やっと九月中旬から
改装を始めたのですが、テナントの住んでいる
ところでの工事ですから仕事はなかなか捗らず、
テナントの引越しは二十七日でした。こんな
様子を見てみると日本では大問題になる居住権
などは……。

二十九日に三〇人分（二人用×十五）の机、
椅子、ホワイトボードが入るとやっと学校らし
くなりましたが、台所の改修、寝室のペンキ塗
り等々で三〇日の夜から住むことが出来ました。
居住性に問題はありますが住めば都になるの
でしょう。

一期生の募集（三〇人限定）は新聞広告など
で問題があると困るので、ヤンゴン在住の日本
人（日本人会名簿）を通じて二週間足らずの間
お願いしたのです。十一月からは新聞広告にて
早朝クラス（七・三〇～九・二〇am）を募集
します。会社、官庁に行く前に勉強する方式で、
若干の遅刻が認められる習慣だそうです。少し
大変ですが、郷に入れば協力して見るつもり
です。

ヤンゴンの生活と言ってもみなさんには想像

もつかないでしょうが、戦前の日本と言った状
況です。食べ物は何でもありません（例外は牛蒡、
三つ葉など）。と言ってもトマト、玉葱、馬鈴
薯などは日本の四分の程度で、人参は親指ぐ
らいの太さです。ネギはまだ見ていませんが季
節によりあるのかも知れません。

変わったものでは食べるお茶、この頃はこれ
で水割りを飲んでいきます。軽工業製品はほとん
どが輸入品ですから、ちょっとした物がな
いと、探すのに時間がかかります。物価はインフ
レと言っても外国人には安く、例えば米（シャ
ンライスは日本の中級品と同じ味、ただ、粗ゴ
ミがいっぱい混じっています）は二kgで一五〇
チャット（一二〇円）、牛肉三kgで二五〇チャッ
ト、また人件費が安いので町の理髪店のヘヤー
カットは三〇チャット、頭洗いも六〇チャット、
頭洗いに比べて大変でした。

水道はほとんど当てに出来ず自家用井戸のポ
ンプ汲み上げ、下水はなく浄化槽、電気も停電
が多いと聞いていました。私の家のそばにお
偉いさんでもいるのか、二〇分の停電が二回と
一時間が一回だけで助かっています。

今は雨期ですが、半日は曇りか晴れており、
二月下旬から暑くなります。観光旅行は十一月
～二月がよいでしょう。

締めくくりに私の『ヤンゴンの一日』を日記
から紹介します。

「家の周りのヤンゴンの朝は六時前後の物売
りの声で始まる。頭に品物を乗せた物売りの声
である。この声はホテルに泊まっていたは聞く
ことが出来ない。六〇年前くらいの東京の下町
（神田）にも今は消えてしまった多くの呼び声
があった。ヤンゴンの呼び声もあと何年ぐらい
続くのだろう。

まず六時半（日本時間九時）のNHK短波放
送で日本と世界の情報を一分位聞いておく。
今は十一月下旬から乾季に入り、朝六時の気温
は二五／二六度位、今年の最低は二〇度。日が
昇るにつれて気温は上がり夕方五時頃は二十九
／三〇度になるが、体がなれてきたのかじっと
していると汗も出てこない。こんな訳で日照権
などはなく、西日の当たる場所がヤンゴンでは
日本の鬼門に当たるのかもしれない。

早朝クラスの授業は七時半に始まるから朝飯
は七時迄に済ませるようになっている。朝は通勤
のお手伝いさん（六時半～五時）の用意したパ
ンと麺を一日おきに食べている。ヤンゴンの一
般の朝食は何種類かの麺で、街頭にも食べさせ
る店が沢山ある。（一食一五／二〇チャット）
（一チャット〇・八円）

九時二〇分に早朝クラスの授業は終わり、私
の自由時間となる。住居と職場が一緒なので通
勤時間は〇、また直説法（日本語を日本語で教
える）の教材（例えばライター、傘など）をす

ぐ持ってこられるのも便利である。

昼はお手伝いさんの手料理となるが、変化があつて楽しい。ご飯はシャンライスを使うと結構日本米に近く（少しねばり気が強い）、炊きたてはとてもおいしい。

一時から三〇分〜一時間昼寝、これが私の活力の原因となっている。相撲の時期は二時四十分からNHK（時差二時間半）がよく聞こえるので約四五分の放送を楽しんでいる。日本にいればテレビを見ながら一杯と言ったところだが二時半では早すぎる。夕方の授業は五時半からなので、それ迄が自由時間で時々マーケットに買い物に行く。買い物は女中さん一任となっているが、偶に新しい材料を見つけ、例えば苦瓜（二〇チャット）とトーフ（七チャット）で沖縄料理のゴーヤチャンプルを作ったり、大根おろしも最近はお手伝いさんが作るので、軽く茹でたオクラの薄切りを入れて冷やしたりしている。肉は鳥、豚、牛の順に安くなり豚二kg二五〇チャット、牛二kg二〇〇チャットの塊を買つて豚の角煮、ポトフなどを楽しんでいる。一度だけ生きたカニを見つけて八匹一〇〇チャットで買ったし、イカは二、三種類売っているが、タコはまだ見たことがない。

日本で一円、二円の使い道はないが、バスの空いているときに利用すれば歩いて二〇分くらいの距離を二チャットで乗ることができる。物

価が安いので暑いことを気にしない人にはよい処と言つてよいのだろう。

乾期の終わり四月が一番暑く、五月中旬から雨が降り始め気温は下がってくる。

一九九七年六月」

以上のような生活をしておりますが、ご関心

のある方はミャンマーツアー旅行の途中に是非お立ち寄りください。なお、一番暑い季節の四月〜五月は学校の夏休みなので一時帰国します。

「アメリカの山のことなど」

佐 薙 恭（昭三十一）

九一年夏から私は米国デトロイト近郊で駐在勤務している。この会報発行の頃には多分任期満了で帰国している筈である。この六年間の少し前辺りからの私の山との係わり合い、更には余り係わらなくなった経緯などを振り返って見たい。

(1) 策ヶ岳

九一年のゴールデンウィークの前日、私は七月からの米国勤務の内示を受けた。五九歳にもなつて今更海外勤務はないだろうと多寡を括っていたので少なからずショックを受け

た。翌日、前夜のやむを得ぬ深酒ですっきりしないまま前から予定の策ヶ岳に向け単身家を出た。二、三年前に「甲斐駒から光まで」というテーマを終えた私にとってこの山は南で残り残した気になる山の一つであった。四月二十八日軽装で日帰り往復を狙い転付峠のテントを出発したのは午前三時少し過ぎだった。このプラン発想の原点は相当前に会報で読んだ山崎先輩の“行きも帰りも星を戴いた”夏の二軒小屋から策ヶ岳日帰り往復の記録である。今回は残雪期だが二軒小屋の峠の往復

が無い分だけ先輩の計画より楽で何とかこなせる筈という読みであった。この山の他の登路、たとえば早川溪谷筋から殆ど直接登りつめるのは地図上の等高線の込み具合に辟易して頭から考慮の対象外であった。峠から歩きだしてみると連休の始めで誰の踏跡もないのは覚悟の上だが樹林帯の中の予想以上に多い残雪に足を取られなかなかペースがあがらない。長い休み抜きで七時間も歩いて漸く黒桂岳だ。一息入れて手帳の予習プランと比較してみるとここまで無雪期の倍の時間がかかっている。仮にこれから先も今までと同じペースが可能としてテントから山頂往復テント帰着までの所要時間は休憩無しで正味二十三時間という計算になることが判った。まだ陽は高いが“駄目だ。諦めよう”と決めるまで左程時間はかからなかった。峠のテントにもどったのはもう夕刻であった。次の夜三日間の汗を流して私は奈良田の白根館の食堂の片隅で食事をしていた。ふと見ると部屋の反対側の楽しい三人連れの一人は香港に駐在中の筈の中村保兄ではないか。甲府で社会人生活を始めている息子さんと親子水入らずのひとときを一時帰国して過ごしているのだという。翌朝二人並んでそれぞれのカメラで彼の奥さんに写真を取ってもらって別れた。去年出版された彼の力作「ヒマラヤの東」のページを

今めくってみると彼はほんの二、三週間前に第二章「サルウイン川」を済ませたところだったのだ。彼のあの地域へのこれまでの思い入れと実績、更に今後にも続くであろう取り組みからすると彼にとっては大作のまだほんの序曲が始まったところだったのだろうが、私にはその時そんな風に理解する術は無かった。

(2) マウントホイットニー

米国中西部には山が全く無いことは勿論前から知っていた。山らしい山は東京から台湾位の距離にあり、とても毎週や毎月の趣味の対象ではない。殆どあきらめていたところ三年いわば“たなぼた”でこの国の山に登る機会を手に入れた。カリフォルニアに駐在中の会社の後輩I君が同州のマウントホイットニーに誘ってくれたのだ。“北に車を向ければ白き峰あり、名を問わば”式の純粋な動機らしい。四八州最高峰(四四一八米)のこの山のことは以前加藤博行君(S五十二年卒)が佐藤活朗君(S五十三年卒)と登った記録を会報で読んで知っていた。早速日本の加藤君の自宅に電話して記録の写と情報を送ってもらった。登山者の入山制限があること、山中に小屋など商業的施設が一切無いこと等は変わっていなかった。入山は日本からの会社幹部出張の邪魔が無い株主総会の頃、六月下旬とした。季節的には少し早めで残雪が多く

部分的にピッケルとアイゼンが必要であったがルートは加藤君達と同じだったので山そのものの説明は重複を避けここでは省略する。私には面上是非この登頂を成功させたい家庭の事情があり走り込みや階段登りで十分体調を整えて臨んだ。好天に恵まれ幸いにも私は左程苦勞せずに自分にとっての最高峰への登頂が出来た。しかしパーティとしては予想外のことが起こり成功とは言えなかった。先ず三六〇〇米のテントから登頂の朝、この山行の発案者のI君が前夜の旺盛な食欲が嘘のように不調となり寝袋から抜け出せず登頂を断念した。次に私の登頂成功の翌朝テントを撤収下山する日、前夜には十分体調回復と思われたI君が又も絶不調になってしまったのだ。もうろうとしていた彼に兎にも角にも荷物をまとめさせ下山開始の頃もう陽は相当高くなっていた。彼は数分程歩くと腰を下ろし居眠りを始めてしまう。その繰り返し限りなく続く。彼の体格は関取級で日本ではジム仲間だったが一緒にの山行は今回が初めてだった。計画は加藤君達と同様登頂の日に一挙に下山の予定だったが高度差八〇〇米をこなしてテントに帰った私の足取りを氣遣って彼がもう一晩ここに泊まり翌日撤収しようとして提案してくれたのだった。彼はその時は殆ど元氣回復のように見えたのだが。

長い夏の日も次第に夕方の気配になり下山とはいえ気持ちに焦りが出てきた。彼の荷物を次第にこちらに取り込むが効果は少なかった。二、三日の行程だから二人分の荷物の重量は大したことはないが昔の特大キスリングと違い今風のザックは他人の分まで収容するスペースの余裕が少ない。最後は胸と頭の上にも荷物を担ぎ入り切らない分は翌日回収すべく山中にデポした。一方のI君は全くの空身で牛歩を続けた。山腹の駐車場に着いた時は真暗闇だった。登り八時間の行程に下り一二時間を要した。私は自分或いは身近なパートナーの高山病を今まで本格的に経験したことが無いのでよくは判らないがI君の場合山中の二晩共旺盛な食欲だった。それでもこれも高山病なのだろうか。一方の私は山中では用意したラーメンなどは疲労のため殆ど喉を通らず夜は担ぎ上げたウォッカ、昼間はM&Mや蜂蜜等が主要なエネルギー源だった。下山後山麓の宿からミシガンの自宅に電話するとオーション仲間の高崎が西海岸に出張してきているという。次の晩は暫くぶりに彼と一献傾ける機会が出来た。デポの荷物を私が単身で回収した後、下界では全く元気なI君の車で高崎が待つロングビーチのホテルまで送ってもらった。私がチェックインの手続中に初対面の高崎とI君はこの山行について少々

会話を交わしたようだった。お陰で私の説明だけでは信用しなかったかもしれない高崎に饅々説明する手間が省け美味しい酒に専心出来てよかった。

(3) マウントレニヤー

家族の笑いや者にならないためホイットニーを成功させたかったのは九〇年のマウントレニヤー（標高四三九四米）の失敗があったからである。タコマ富士の別名を持ちシアトルの空港からその美しい姿を見ることが出来るこの山を私は六〇年代から知っていた。気にもしていた。米国の知人から送られた案内で南面の山麓パラダイスの登山学校に入れば都合三日で登頂出来ることが判った。先ず初日は技術、体力のチェック、二日目は山麓から中腹のキャンプミュー（高度差一五〇〇米）の岩室のような無人小屋まで登り仮泊、三日目は夜中発ここからはアンザイレンで氷河上を山頂往復し（高度差一三〇〇米）更に山麓まで下るとするのが標準プランらしかった。国際電話で申込み参加費も送金し、八月わたしは家族の視線を背に感じながら冬山個人装備一式を担ぎ成田からシアトルへ飛んだ。結果は初日のチェックで不合格を言い渡されてしまった。氷上滑落防止訓練は山岳部時代のそれで何とかこなしたが、歩くスピードが問題だった。私流はゆっくり、しかし余り休ま

ず長く続けて歩くのだが、この学校の歩き方は相当速くその代わりちよくちよく休む方式でとてもそのスピードについていけなかった。参加者の大半は海兵隊現役という感じの男性が大半だった。参加費の殆どを返してくれたが、そんなことよりこの初級コースで成功したら次はこの学校の中級コースに参加し何れ最終的には上級コースのマッキンレーまでもと期待していた甘い夢が一日で潰されてしまったのが残念だった。計画挫折で余った日程消化のためキャンプミューまでの雪渓歩きや東面の山麓拠点サンライズへの山岳ドライブ等をして日本へもどった。

(4) アイロイアル国立公園の小さな山々

ホイットニーに登った九三年の夏は八月にも夏休みが取れることになった。どこへ行くかは専ら家族、といっても今やワイフだけが、の意向に従うことがこの際、政治的に正しい“進め方と判断しワイフの希望を聞く”日本人がぞろぞろ行かない所”が第一条件という。ロッキー、ヨセミテ、ディズニー等は除外ということだ。更にワイフは水洗トイレと毎朝のシャワーと歯磨きは絶対必要条件という人種に属する。私は五大湖最北のスーパーリオル湖北端の島、アイロイアル国立公園に以前から関心を持っていた。夏だけの公開で利用者の年間合計がイエローストーンの

一日分と同じだという。本当はテントを担ぎ数日トレイルを歩くのが理想的だが島の唯一のロッジをベースにして歩きまわるのもこの際次善策として悪くはない。二つの条件もクリアー出来る筈だ。ここに決めスニーカーしか持たないワイフの簡単な足ごしらえのために町の登山道具店に行く。行き先を聞いて店員はくるぶしまでカバーするトレイルブーツが要ると言う。そんな靴を履いたことの無いワイフは目を白黒させこちらの魂胆に気づくがもう遅い。あちこち予約済みだ。同じミシガン州内のこの公園に行くには我が家からは一日中ドライブし州北端の小さな港町に泊まり翌早朝一日一便の四〇人乗りの船で四時間かかる。湖は海のように広い。島は長さ四〇マイル強、幅五マイル位で長さ方向に三本ほど湖面からの高度差最高二二〇米の頂（海拔四二〇米強）を持つ尾根が走っている。自動車は無い。トレイルが岩と木の根でゴツゴツで自転車も走れない。島のあちこちに行くには歩くかモーターボートのタクシーに頼るしかない。ロッジに食堂はあるが個室には電話もテレビも無い。ここに四泊ほどして近くのトレイルを歩いたり、水上タクシーを利用して島の反対側の尾根の頂に登ったりした。期待の狼やムースには残念ながら出会わなかったが夏の間は四八州北部の大自然の中でしか

見ることの出来ない野鳥を何種類か身近に見ることが出来た。予想通り日本人には会わずワイフが持ち出した厳しい条件をクリアーした。

(5) この頃のこと

私のホイットニー登頂を知った欧州駐在の若い会社の岳友F君が本場アルプスに誘ってくれたのは九四年と九五年の夏だった。F君はその数年前グランジョラス北壁の実績のある錚々たるクライマーだ。今思うとこの「たなぼた」を手にしなかったのは大変残念だったが、仕事の事情などもあったりしてどうしても腰があらなかった。九六年にはもう誘いは来なかった。

ここ三年以上山らしい山から遠ざかっているのは私自身がこちらに来て覚えた野鳥を見るという新しい趣味のせいでもある。私達のここでの住居は郊外の自然豊かな環境にある。広い裏庭に沢山の野鳥や小動物がやって来る。転居当初全く友人や知人のいない動物好きのワイフは餌をやり図鑑を求めて初めて見る野鳥の名前や習性を覚えていった。私も次第に引きずられて興味を持ち始めた。九三年夏アイルロイヤルで珍しい野鳥何種類かを見たことが更にこの趣味に夫婦でのめり込む決定的契機となったようだ。米語の表現では「We were hooked.」というらしい。地元愛好家

グループ主催の探鳥会で指導を受けたり、専門の探鳥ツアー会社の北米各地のツアーに参加したりして益々深入りしている今日この頃である。山岳部OBの会報で山以外の趣味にスペースを使うのは本来の目的に副わないから近況報告はこの辺りで打ち切るが私の野鳥への興味は山への気持ちとかなりミックスしている部分がある。将来是非参加したい探鳥ツアーの一つはカナダ北東部のバッフィン島で、あの極北の大地で生活する野鳥や動物を見たりツイドラや氷原の上を歩きたい。また、マッキンレーの登頂はもう無理かもしれないが野鳥の宝庫アラスカの各地も是非歩きまわってみたいと思う。

大学院生として考えること

上原利夫（昭三十三）

私は一九五八年（昭和三十三年）一橋大学経済学部（サンガクブと読んでもよい）を卒業後、三九年ぶりに母校（大学院法学研究科修士課程）で学ぶ道を選んだ。国立のキャンパスには一橋山岳部の部室（山小屋）もある。時には顔を出そうと思うが、今春から小平の教室が全部国立の新築校舎（旧専門部跡地）に移転したので、一年生及び二年生の部室利用が高まると思われる。

私は今でも月一回程度山に登っているので、一橋山岳部に再入部するかもしれないが、四〇才も若い人達と山行を共にするのは難しい。それよりも気になるのは部室の損耗である。目立たないように修復する方法はないだろうか。施工のマスタープランを作って、針葉樹会の財政支援と部員の労働により、コツコツと完成させることを検討してみても如何が。

ところで六十二才にもなって、何故大学院生

になったのか。私は五十六才のとき常勤監査役になり、監査役の悩みを知った。わが国特有の法制であり、取締役の職務の執行を監査するの役割であるが、法と現実には溝がある。この溝を埋める方法として、実務経験に照らして法制を見直すことが不可欠と思われる。についてはこれに取組んで、不祥事の防止に貢献しようというのが私の課題である。

昨年八月一橋の大学院法学研究科が社会人のための選考を行うことを知った。大学教授に私の主張を読んでもらえる絶好の機会と考え、自己の経歴と研究計画を八千字にまとめ九月初に志願した。書類選考の結果口述試験を十月初に受けた。三人の法学部教授（村井、川村、山内の各先生）との面接であったが、先輩扱いをしてもらい気が楽になった。因みに山内教授（現学生部長）は山岳部先輩の勝田さんのゼミと聞いた。

先年乗鞍の木立山荘でY中さんの追悼会が甘利さんの主宰で開かれた時、九〇才を超える中村爲治先生（讚治さんの父上）が別棟で自炊をしながら、スピノザの翻訳をされていた。これをライフワークというのであろう。山岳部の先輩にも楽しみながらライフワークに励んでいる方が多い。私もライフワークを探そうと思った。ボケ防止に料理がよいと聞いたので料理学院に通い、五〇種類のメニューを習った。毎回復習して家族に食べて貰ったら好評だったが、疲労困憊して続かなかった。

今回大学院で監査役監査に関して研究することにしたのはライフワークのつもりである。体力と根気がいつまで続くか問題である上、元来私は勉強が苦手であるのに、何故こんなことになったのか不思議である。正に六〇の手習いというべきであるが、共に学ぶ二〇代、三〇代の人達がリーダーシップをとる頃の日本を想像し、何かお役に立ちたいと思う。

Piz Päu に登った

石 弘 光 (昭三六)

一九九六年の夏、ベルニナ山群の一つPiz Päu (三九〇五米) に登ってきた。ここ一〇年ほどの間、少なくとも各年に登山かスキーでイス・アルプスに出掛けている成果の一つである。朝、ヒュッテを出て麓の町にたどりつくまで、十八時間に及ぶ長くてつらい道程であった。しかしその充実感たるやすばらしく、現役時代の夏合宿を終えた気分になかった。

その前年、九五年夏にもBlüwisalphorn (三六六四米) に同じく十七〜八時間かけて登っている。この時も山の中腹にあるBlüwischütteを早朝四時に出立、麓のホテルに夜一〇時をこえるという還暦近い身にはいささかこたえる山行であった。

このように本格的にすばらしい山登りが楽しめるのも、ひとえに一橋山岳部にいたことがあるコラード・モルターニ君 (現在、ボッコニニ大学教授) のおかげである。ミラノにあるボッ

コーニ大学は一橋と姉妹校の関係にあり、私自身講義やセミナーのためしばしば訪れている。

モルターニ君の友人でロドルファ・ヘルグ氏も本格的なクライマーで、かつ好具合なことにヘルグ氏の従兄がスイスの本職のガイド、ロレンツォ氏 (姓は失念した) である。かくしてロレンツォ氏に連れられ、前出のBlüwisalphornに私も入れ四名で登ったわけである。この登攀で氷河を越えたあと、滝谷の第一尾根級の岩稜の登りと下降を悪天候の中を強いられたことが鮮明に甦ってくる。

今回のPiz Päuの登攀は、ヘルグ氏が子供の病気のため参加できずモルターニ君と私の二名が、ガイドのロレンツォ氏に連れてもらうことになった。八月二十九日、私はイスラエルでの学会を終えミラノへ、前日到着していた家内と合流し、空港まで出迎えてくれたモルターニ君と一緒に列車でサン・モリッツへと向かっ

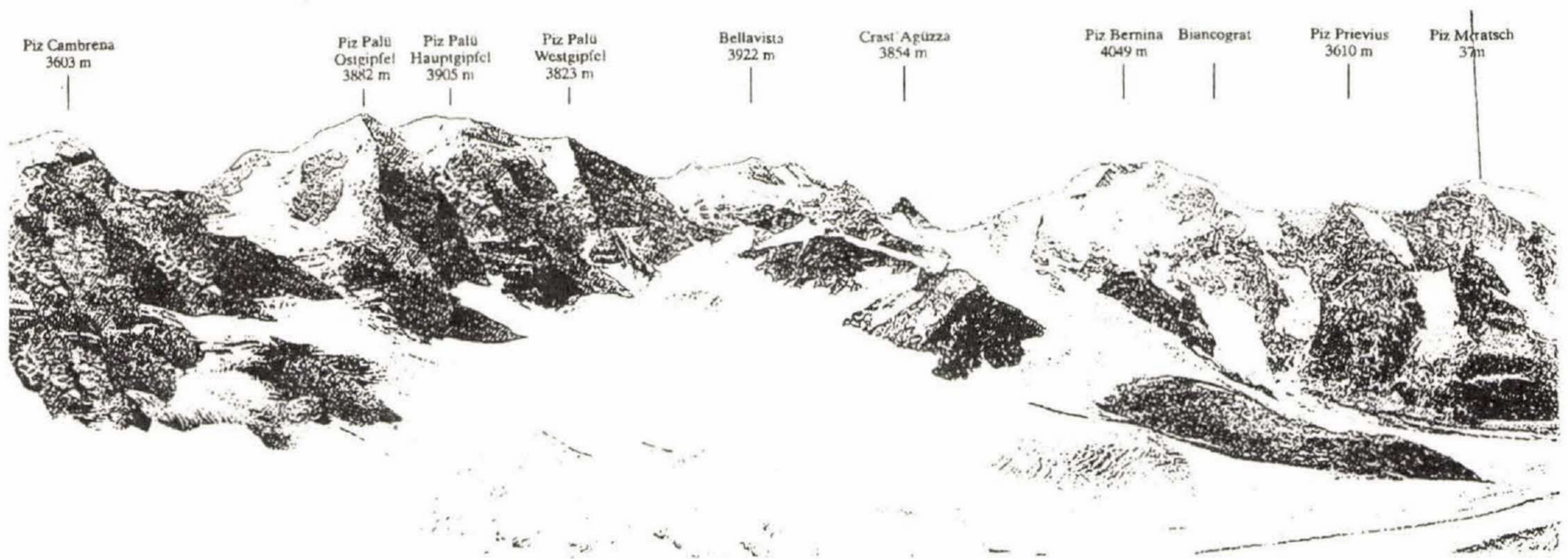
た。イタリアとスイスの国境にあるティラーノからの列車は、いつ乗ってもすばらしい。山間の急勾配な線路をゆっくり登る列車からの車窓の風景は、えんえんと続く山並み、そして氷河の水をたたえた独特の色の湖など、ただ感動するのみである。

サンモリッツの一つ前の駅、ポントレジーナで下車、その町はずれにあるHotel Päuに投宿した。ホテルの名にPäuが付けられているように、私達の部屋からはるか遠くにPiz Päuの頂上を見ることができた。翌三十日は、足ならしのため近くのPiz Languard (三二六一・九米) に家内も入れ、モルターニ君、私の三名で登ることにした。足ならしといっても奥穂よりも高い。その上、前夜降った新雪で頂上付近はまっ白で、本格的装備を身につけていなかっただけにえらく難儀した。

翌八月三十一日、遅れてミラノより到着したモルターニ夫人の紀美子さんも交え、ディアボレッサアに移動。ゴンドラで一抛に三〇〇〇米近くにあるヒュッテまで、翌朝の登攀に備えることにした。このディアボレッサアは一年前の春、ヘルグ氏とスキーに来た所である。ゴンドラ終点から青水と岩だらけの滑降コースを必死に降ったことを思い出した。ゴンドラの窓から前日登ったPiz Languardが新雪に輝いて見えた。その日は午後、近くにあるPiz Cambrena

(二六〇三米)へ、ハイキングをかね往復。紀美子さんと家内はそのままポントレジーナの町まで帰っていった。

その日の最終のゴンドラでロレンツォが上ってきた。いよいよ山登りをする三名が集結したことになる。夕方ヒュッテの食堂の窓から、掲載した図のような山群が夕陽に映えて一望できた(ヒュッテは、図のPiz CambrenaとPiz palu Ostgipfelの鞍部にある)。いやがうえに登高欲が高まってきた。実はわれわれの当初の目標は、この山群の主峯Piz Berninaにあった。このためにはベルニナの稜線上にあるBerninabütte(もう一泊せねばならない。ロレッツォは悪天候が予想される中で、天気はあと一日しかもたず無理だという。そこでPiz Berninaを断念し、Piz Paluのみとした。Piz Paluは図のように三つの頂上からなるたおやかで優雅な山姿をしたこの山群の名峯である。これだけでも登れるだけで、幸せといわねばならない。



翌九月一日、早朝三時半起床、天候はどうやら一日もちそうだというので、ビスケットと紅茶で簡単に朝食をすませ、五時過ぎにヒュッテを出発した。ほぼ同じ時刻にわれわれの他にも、四パーティがPiz Paluを目指すことになった。空に星もなく外は真っ暗で、氷河を少し登りPiz Paluの東ピーク(Ostgipfel 三八八二米)のリッジに取り付く。ここでアンサイレンをする。これから先は、まさに雪と氷の世界であった。一時間半ほどトラバースをすると、一気に成に急斜面の直登が始まった。ところどころに青氷の中にクレバスが口を開けており、ガイドなしでは到底来られないという感じだった。首が痛くなるほど上げないと、先が分からないという急斜面を約六時間、登りつめ十一時にPiz Paluの一番左端の東ピークに到着、そこからセントラル・ピーク(Hauptgipfel 三九〇五米)までは、約三〇分の稜線歩きで十一時三〇分に登頂、他のパーティは「Congratulatijs!」を連発し下山していった。

ここでロレンツォに、このまま下山するかと問われたが三山縦走したいという希望もあり、そのまま先へ行くことにした。天候はどんどん悪化しており、山全体が厚い雲でおおわれてきた。一時見えていた下界もそのうち視界から消えてしまった。実のところ、本格的な苦難はここからの下山ルートにあった。ウェスト・ピー

ク (Westgipfel 二八二三米) を十二時十五分に通過、下降点のある Bellavista (二九二二米) までもう一度、だらだらした稜線を登り直す。稜線は両側が切れ落ち狭く、けっこうしょっぱい。高度感抜群の個所も多く、いささか緊張を強いられた。

アルプスのガイドは、大体一時間ピッチでわれわれを歩かせる。食事の時間とてせいぜい二〇分程度。馴れてしまえばなんともかつが、それにしてもよほど覚悟してかからないといけない。下降点のある Für de Bellavista に到着したのが午後二時、ここから図に見られる黒い岩稜 Fortexxa (岩の意味) を降りることになった。ロレンツオもこのルートは初めてだと言う。そこで地元のガイドにたずねルートを研究してきたようだが、彼等はいずれもが、下降は no problem だと説明したとのこと。ロレンツオはアルプスのイタリ人のガイドであり、地元のガイドからすると企業秘密にあたる下降ルートの情報を十分に提供したくなかったであろう。下山した後、ロレンツオは何が no problem だとかんかんに立腹していた。

下降しただしてから天候は完全に悪化、吹雪となる。その上、Fortexxa は滝谷の第三尾根級のルートで岩稜の下降到三度、ドッペルで下りざるをえなかった。アップサイレンは現役時代に、剣と穂高で経験済みだがドッペル下降は初めて

であった。ロレンツオが上で支えてくれるザイルをハネースに結び、sit down の姿勢で降りろという彼の指示に従い行動をおこすが、オーバーハングの下で完全に空中に放り出されきりきり舞いをする。しかしさすがはアルプスのガイド、客が意気消沈してくるとことさら陽気に振る舞い、われわれを元気付けてくれた。夏山でこんな雪山になると考えていなかった私は、オーバーズボンなしのニッカー・ズボンだけに、下半身がびしょりと濡れ気持ち悪くて仕方がなかった。

岩場が終わると今度、クレバスを避け氷河に降りる下降点を探さねばならない。結局、Fortexxa を下りきり Montratsch 氷河のモレーン地帯に辿りついたのが午後七時であった。実に五時間、ほとんど休まず岩稜地帯を下降してきたことになる。七時といっても、夏の夕暗みにはまだ薄明かりが残っていた。しかし次第に暗くなる中、クレバスが所々口を開けている氷河を下るのも、なかなかの難行であった。クレバスが乗り越えられず、来たルートを再び登り直すなどしてえらく時間がかかり体力を消耗したのを思いだす。ただ氷河の出口にあるモンテラッシュ・ホテルの明かりが、われわれの終了点を示してくれていたのが唯一の心の安らぎであった。

氷河もなくなり河原の石だらけのルートになっ

てからも長かった。行先のホテルの明かりも消え、真っ暗な道なき道を歩いてやっと夜一〇時半、モンテラッシュ駅に到着した。これで長かった一日の山登りも、無事に終わった。ここでモルテーニ君と感激の握手をした。そしてあらためて、ロレンツオに二人して心から感謝したことはいうまでもない。今夏は無理だが、来年にでも彼にまたどこかいい山へ連れて行ってもらうつもりでいる。体力、気力、山の知識、人柄どれ一つとっても、アルプスのガイドはすばらしいと思った。ロレンツオと知己になれたのも、アルプス登山の大きな収穫であった。

(一九九七・六・十五記 エコノミスト村にて)

お正月の山 —— 加賀白山

倉 知 敬 (昭三十八)

古来、日本では天に坐まします神に近付くために聖なる頂きを目指し、登山の発祥に至った。今日まで、神聖なる高山で迎える御来光は身を清めるとされ、更に初日の出を拝むのは至福の勤行と見なされている。

学生の頃から、思えば長く山登りを続け、それは決して宗教心からではなくスポーツとしてでしかなかったが、束縛の多い勤め先のある身分では、限られた休日をあわただしく活用した即興的登山の類が多かった。そういう中で常に最も熱心にエネルギーを費やし長く切れ目なく続けられて来たのは、結局のところ正月休みを利用した山行だったと云える。

それは、積雪期の山が総じて刺激的で面白いという所為であることはさることながら、比較的長い日数が使えるとか、仲間がそろって休みがとれるといった即物的事情によるところもあって、何しろ長続きしたのであった。その内に、

年の初めに区切りよく山頂に立つと、その年は誠に縁起良いように思われ、実際うまく事が進んだり、登れなくても奮闘した山での体験はどこか心に張りをもたせる効果を及ぼしたり、つまり正月の山は生活のリズムの中に溶けこんでいたのだった。

こうなると山はもはや、そもそも対象がアルピニズムとは縁遠いものだから当然とはいえず、純スポーツの域からいささかはずれた対象と相成り、周りの状況など見境いなく打ち込むような所、例えば家族に不義理することなどあって、熱心に何かに没頭するという要素を見て云えば、登山そのものが宗教的行為と云えなくもない。宗教としての登山ではなく、山岳宗教とも云うべきであろうか。

冬山で山頂の初日の出というわけには中々いかないが、元旦に山頂に至るといふ計画を立てるのは、天気次第なるも、そう難しいことでは

ない。元旦登頂というのは今迄何度か経験したが、それは気分良いものである。

さて、一九九七年の正月山行は加賀白山——
釈迦岳經由の雪稜ルート、と決まった。参加者は、中島 寛、三森茂充、寺島 進、それに小生の四人。白峰村より白山西面に入り、主脈にほぼ平行して北上する尾根をたどって釈迦岳を越え、主脈上白山の北方にある七倉山へ登り白山へ至る、という主に雪稜から成る大迂回ルートを、キャンプを二つ設けた上、三日目に頂上往復、それに下山一日の四日ばかりで登ろうという計画である。

実は丁度十年前の八七年正月にこれと同じコースで白山登頂を目指したのであるが、その時は日数不足と大雨にたたられるという不運のために、釈迦岳の先までで引き返した。その年は例年に比べ特に寡雪であったので、雪深い白山も登り易かろうと思いついたのだが、結果はそんなに生易しくなかったのである。

そういう訳で十年後に又思い立ったわけだが、十年も経って体力は衰えているし、今年は雪が特に少ないという事情でもない。今年何故白山なのか、という訳は、今度は正月休みが長くどれじつくり登れるという所にあった。暮れの二十九日から一月三日まで最長六日間見込んでも、まだ休みの余裕があったのだ。また、体力の方

は若い寺島君が参加することになって、ボッカやラッセルの負担はかなり軽減すると期待された。おそらく、通常正月のシーズンなら、他パーティの踏跡など利用できて楽に登れる人気ルートと違って、白山では前回同様誰も入らず、ルートファインディングから何もかも自分達でやらねばならないことが予想されたので、道標用の竹ざおまでそろえるなど、冬山の用意はひととおりしっかり整えて、出発の日を迎えた。

こうして我々四人は、二十九日の夜、白峰村のホテル八嶋に集合した。一人三森君のみ、長駆東京から四駆車で来てくれたが、それは麓の長い林道を車で出来るだけ入り、アプローチの苦労を何とか省略しようという魂胆からであった。ところが、到着後判明したのは、白峰村はずれの林道入口にしっかり鉄のゲートが閉まっていた、その辺りではほとんど積雪もないのに全く車が入れないという悲しい現実だった。

三十日早朝、我々四人はずっしり肩に喰い込むザックを背に、林道入口から歩き始めた。林道といってもりっぱな舗装道路が、手取川沿いに延々と続く。これを市の瀬まで約十キロたどった後、山に向かって入り込む湯の谷川沿いの林道を約四キロ登って、やっと夏の登山道入口に至る。

天気は快晴で暖かく、冬山入山の重苦しさを

どかけらもないが、たんたんと続く道ははかどらない。次第に周囲は雪景色風になり、足元の雪も市の瀬近くでは二〇センチほどとなって来た。四時間あまりの単調な行進の末、市の瀬に到着、昼食をとったが、もはやげんなりした気分疲労感も残る。

午後は徐々に深くなる雪の林道、というよりもう山道を、ボソボソともぐる重い足をひきずって歩きつづけるが、登山道入口から上へ出来るだけ登っておこうというその日の予定行程は、とても無理なことが次第にはっきりして来た。十年前に来た時の積雪と比べると、かなり深いのである。登山道へは湯の谷川を対岸にわたってから取り付くのであるが、せめてその谷を渡る橋まで、というつもりも苦しくなって来た。やがてワッパが必要となってペースは落ち、しばらくがんばったところで、岩間を流れる小溪流を見つけたので、そこに幕営することにした。

登路となる幅広い尾根は、もう対岸上手間近にあり、橋付近まで空身でトレースをつけるために往復して来たので、一日目のキャンプ地としてはまずまず予定の内と云える。尾根の樹林帯でのラッセルがきつくなければ、翌日そこから釈迦岳頂上付近までテントを上げるのは、さほど難しくなろうと思われ、釈迦岳からなら、白山頂上往復は一日仕事で何とかなりそう、という計算である。

三十一日、再び快晴で明け、雪も更に止まって来ているもよう。ワッパ着用し、交代でラッセルしながら進む。登山道入口から、樹林帯を夏道沿いにジグザグに登って行く。踏跡は全くなく、少々雪面がへこんだところが夏道らしいとわかるが、次第にはっきりしなくなって来た。雪は下がしまっているもので、さほどもぐらさず、どこでも歩けるが、迷うところには幸い色あせた赤布が枝に結んであるのが見付かり、ほぼ間違えないで登ることが出来る。我々も適当に持参の赤布をつぎ足しつつ進んだ。

登り続ける内に、次第にそれぞれの元氣さ加減の差があらわれ、若い寺島君が、一番の重荷にもかかわらず、ほとんど先頭でラッセルしつづける具合になって来た。あとの三人はそれでも必死に登り続けているのである。ともかく、深い新雪に全身もぐるという状態ではなくて助かった。彼の馬力がつきぬ限り、行程は進むのである。

やがて、釈迦岳の頂稜が頭上に見え隠れし出して来た。辺りの樹々も小灌木が増え、樹林帯の限界に近いことを示している。平らな窪地が高台のようにとび出た、気持ち良い格好なキャンプ地に出くわしたところで、まだ午後二時頃で少々早めだったが幕営することにする。あまり疲れ切らない内に休んで、翌日の登頂にそなえようという魂胆である。頂上まではまだ長丁

場だが、ゆっくり備えて早起きする方が望ましい。

そう決めたところで、寺島君と二人で釈迦岳まで偵察がてら踏跡をつけに往復することにした。キャンプ地から一段登ると、もう視界は拡がり、頂稜に向かって広い斜面が一直線に伸び上っている。雪はしまつて来て、難なく次第に傾斜の増す雪壁を登り切ると、青空に真白に映える白山頂塊が谷越しに拡がっていた。十年前の記憶にある曇天のモノトーンの陰気な白山とは打って変わって、すっかり雪におおわれた純白の山頂は、対岸の鎧岩の上に華やかな姿を見せて聳えている。

着いた所は、釈迦岳に連なる前峰の肩ともいうべき山稜の端だったが、稜上は硬雪におおわれ、ラッセルに時間を喰う状態とは思えないので、もうその先はトレースの必要もなからうと考え、この日はここまでとした。

頂稜の左端に、迂回してたどり着こうとしている七倉山が望まれる。

「遠いですネェー。行けるかなア」

と、寺島君が不安そうに云う。そう云われると、左奥はるか先の七倉山は途方もなく遠くにも見え、改めて長いルートを前回の失敗にもこりずに選んだことを後悔したくなった。そもそも再挑戦の前提は、釈迦岳を越えた先までキャンプを伸ばすことだった。そしてそれは初日市の瀬

スタートという計算で成り立つことだった。そうでない現実の今、目前の山を見直して考えて見たが、釈迦岳先分岐点まで二時間、七倉山へ三時間、白山頂上へ二時間、などと一応計算の内に入ることは入る。ともあれ、山は鼻を突き合わせてみるまでわからないのである。

明けて一九九七年元旦。星空の下、午前五時半、ヘッド・ランプに導かれて歩き出す。雪はしまっており、アイゼンがきしむ。きのうの引返点近くですっかり明るくなった。空に薄雲がひろがっているのが気になるが、微風でおだやかな感じ。釈迦岳前峰の稜線は、やせた樹林帯だが、ボソボソの軟雪でもぐる。手間どるかと思っただが、途中から左側を捲いて、たいしたことなく通過。釈迦岳本峰も順調に過ぎて、下りも軟雪だがさほどもぐらず、いいペースで進み、七倉山へ続く支稜との分岐点に難なく到着した。そこには頂上に向かってスキーのシュプールが残っていた。白峰村から派出する砂御前山經由の長い尾根をたどって登って来ているらしい。人影は見えず、どうも数日前のものらしい。シュプールをたどって歩けば楽かと思っただが、もぐって役に立たない。登路の尾根は一旦下って、主稜線まで高差六〇〇米ほどを登るが、それははるか頭上高く、たどるべき雪稜は果てしなく見える。

夏はさだめしきれいな草原だろうと思われる鞍部を過ぎ、ひたすら尾根を登り続ける。足元の雪は安定しており、もうワッパはいらないだろうと思ひ、這松に結びつけて置いていくことにする。

小憩をとった時、三森君が持参の携帯電話をとり出し、谷間では通じなかったが高い所ではどうかと試して見たら、何と、よく通じる。そこで、たぶん起きたばかりの家族と、元旦の朝のあいさつを交わしたのである。ところで、今回の山行には誰もラジオを持って来ておらず、天気予報も聞いていない。空には薄雲が拡がっており、今日の天気がいままでもつか不安であったので、ついでにテレビの予報を聞いてもらって次の休みの交信で知らせてもらうことにする。一時間後の再コールで、結局石川气象台に問い合わせたという最新の予報を知ることが出来たが、それは今日は一日持つ、明日は大雪、というものであった。便利になったものである。安心して今日一日がんばろう。

長大な雪稜は波状に起伏しながら伸び上っていて、コブを一つ越えるとまた先に長い登りが待っている。段々上らなくなる足を無理に上げ、傾斜のきつくなつた七倉への最後の斜面をひたすら登る。右手に望まれる大汝峰が、あまり見上げなくても視界に入る様になって、高度をかせいだことが判るが、やけに遠くに見える。

七倉山の直下に顕著なピークが立ちはだかつており、やっとの思いでそのピークにたどりつくと、強烈な向かい風が迎えてくれた。その先はなだらかなコルまで下っており、コルから右手へ山腹をまいて大汝峰と七倉山の鞍部へ下ることが出来る。そのコルに最後に残った手持ちの赤旗を立ててから、どんどん鞍部へ下っていく。

この頃になると、各自のペースはまちまちで、各々勝手にバラバラに歩くことになった。一番元気なのが中島さんで、先頭に立って皆をリードしていく。鞍部到着が午前十一時半頃、まずまず予定の時間の内である。尾根越しの風が猛烈に吹きすさび、雪片が顔に当たって痛い。地吹雪もようの中、ガリガリに凍った広い雪原をフラフラと歩き続ける。冬の富士山に行くが如しである。

なだらかな斜面は行けどもつきず、疲労感強い足を何度も休めては、流石にスケールの大きい白山の頂稜を次第に高みへたどり、ようやく大汝峰の頂きに到着、十二時半。

エビの尻尾の大きな固まりと化した岩の陰に入ると、何とか風はさけられた。広い頂上の向こうの端には白い鎧におおわれた社らしきものが見える。上は青い空が抜けて見えるが、南方の剣ヶ峰付近は雲の中である。最高峰は御前峰だが、ここまで来れば登った内に入るだろう、

往復していると帰りの時間が足りなくなる。

釈迦岳あたりから望むと、白山の頂上群の中で幅広い台形をした大汝峰がひときわ大きく目立って見えるが、我々はその一方の端に立っているわけである。長い道をたどりついただけに、よくぞ来たものだという感懐は強く、充分な手応えを感じたのであった。

帰りは早い。それぞれのペースで、来た道をゆっくりとたどった。下るにつれ、天気は落着いて来て、すっかり快晴となり、往きの緊張感とは打って変わってのんびりと下った。しかし雪もゆるんで来たので始末悪く、釈迦岳を登り返す頃はワッパを穿く羽目となった。もぐる雪に足元をとられ、疲れた身体にはつらい下山となった。薄暗くなった午後五時半、帰幕。まずまず予定通り運んだ登頂だった。

予報通り、夜半から雪が降り出し、雷まで襲って来た。何度もテントは稲妻で明るくなり、かなり近くに落雷した気配だったが、凹地に幕営した所為か事無きを得た。夜通し降り続く大雪となり、翌朝起きて見れば、周りは樹々もうまる新雪に世界が一変していた。

もとより下り道は消えて、降りしきる雪に押し黙ったような樹林が広がっている。下山を始めてすぐ、どっちへ下ればいいのか見当もつかなくなってしまう。ひとしきりあちこち迷っ

ている内に、目のいい寺島君が、半ば雪をかぶった赤布らしきものを、数メートル横手の枝先に見付けた。

それからは楽だった。往きに結構たんねんに赤布をつけておいたお陰で、時々見失いつつもどうやら赤布に導かれて、迷う程のこともなく下っていく内に雪も小止みとなり、新雪の量も減って来て、無事林道へと下り着いた。

市の瀬で一休みした後、再びあの長い車道歩きが始まった。すっかり新雪にうずまって、いからか歩きにくかったが、もし往きに運良く車で入れていたら、帰りに苦労したかも知れない。それにしても長い道のりを、疲れはてて白峰村にたどりついた時には、もうすっかり暗くなっていた。

丹沢 寄(やどろぎ)小屋の収束

三 森 茂 充 (昭四十〇)

寄(やどろぎ)は新緑が似合う。つやつやし

た浅緑が初夏の光に映える茶畑の際で野蒜を引き、近くの沢で芹を摘む五月は私の好きな季節である。小屋の主人サブちゃんが鉄砲の季節を終えて、小屋に集まる山仲間の面倒を昼間からみてくれる時期でもある。

昨年(九六年)で収束した小屋には未練はあるが、しばらく人気のない小屋はうらぶれて入る気がしないし、第一今日(五月二十九日)は寄大橋まで行く余裕もない。せめて寄の冷気に当たりたくて、仕事のついでに部落の旅館平成館に泊まることにした。

中津川のどんづまりのこの部落は秦野峠を越えれば西丹沢の玄倉(くろくら)、富士山や南アルプスが一望出来る鍋割山、丹沢湖が見渡せる松岳(ひのきだっか)、桜の高松山などが近い。

平成九年一月吉日

神奈川県足柄上郡松田町寄3408

大館三郎様

前略、先日は挨拶状を頂戴し有難うございます。

寄小屋の収束は、一つの時代の終わりを告げているようで一抹の寂しさを感じます。永年に渡り大変お世話になりました。われわれ悦酒徒(注-EST・山とスキーと酒を愛する仲間の末公認集団)にとっては、登山と集会の根拠地を失うわけでその影響は深刻です。

また、過日、三森君が現れて、自然薯大物一本届けてくれました。早速、三男坊主に命じて丁寧にすらせ、とろろ汁をやや固めに調整し麦飯にかけて食しました。愚妻の作成したドテ鍋ともども日本の原点のような喰物でありました。

これは最強時の帝大エイトを漕いだ敬愛する会社の先輩の礼状で、入社以来、三十年以上も丹沢で遊んだ私たちの心情を代表している。そう言えば闘病中に「丹沢五十山」なる怪しげな

書物を著したこの先輩は、ご先祖が伊勢原あたりの天狗だったそうだ。

森村文庫で有名な森村産業の私有地の借地で建てた寄小屋はオートキャンプ場のユートイリティーとして利用価値があり、十年も前から返還を要求されていたものだ。秦野峠を越えて玄倉に降りる林道が通じてしまったことも拍車をかけたようだ。これで二十年続いた小屋の火が消えてしまった。

寄小屋は水無川本谷沢の仲小屋のおじい、故北村政次郎が当初別宅として部落の端に農家を借りて住んだ小屋の名前で、その看板を持ってサブちゃんが現在の場所に新築したものだ。サブちゃんはおじいの手伝いをして中学生の頃から二つの小屋に通い山仲間の世話をしていた。

おじいの十七回忌がこの二月に秦野の龍法寺で執り行われたが、五十人程度集まったオールドボーイ・オールドガールの話題は、仲小屋の存続問題であった。地元のたけちゃんこと小俣太警子が頑張って仲間の希望に応じ、休日に小屋を開けても朽ちるばかりの現状では、費用も手間も掛かるだけでこれ以上存続は無理である。この小屋も間もなく終焉を迎える。

サブちゃんはJRの定年までの五年のうちに、新しい小屋を建てる計画がある。道路や車のお陰

で近場の丹沢に泊まりがけで来る客も珍しくなつて来た今、商売としてはとても難しい。サブちゃんに手造りのログハウスでも造って貰って応援団

の一人にでもなろうと考えている。兄弟のつもりで付き合っているせめてものお返しにしたい。

に駐在した時には不便だった交通網は、MTR（地下鉄）、KCR（九広鉄道）なる鉄道が整い格段に便利になっている。

加藤君所属の新潟県人会の短パン、Tシャツ姿（まるで海水浴の様な格好）の中年メンバーが一〇人そろった。いささかあきれて挨拶は何ともぎこちないものになった。そこからタクシーで山波の裏側の新界へ通ずる街道を十五分ほど走り、野生の猿が走り回る猿山なる峠で下車、ただちに歩き始めた。さっき歌舞伎町でタクシーに乗ったのに十五分後にはもうヤビツ峠を歩き始めた様な具合。便利だ。

香港山暮らし

金子晴彦（昭四十六）

香港に赴任してそろそろ二年になる。時折横浜の自宅に帰るとその静けさと広さに驚かされる。つい緊張の糸がほぐれてウトウトしてしまう。

ピークの緑したたる山肌しか見えない場所を選んだ（無論この方が安い）。これを称して香港山暮らしと言えるのではないか、そう思い始めた。その子細を報告したい。

I 初めての山

それにしても香港に山など有るのか？

東京都の半分以下の土地、しかも海沿いの限られた土地に六三〇万人が住み、そこに年間一二〇〇万人近い旅行者が訪れる。そして、金融だ、不動産だ、中華グルメだ、観光だ、香港返還だと騒ぎまくる。神経がいささか高ぶるのはいたしかたない。

着任後一週間目の九月の第一日曜日、針葉樹会五年後輩の加藤君の誘いで九竜半島の北側に連なる山波の最高峰、大帽山（九一七米）に出かけた。

その香港で着任以来、既に五〇回以上も山登りをし、台湾、コタキナバル、ブータン、中国等海外の山への「遠征」も五回を数えた。住みかも香港のビル街には背を向けて、ビクトリア

待ち合わせは八時半、MTRの太子（プリンス・エドワード）の駅に有るハンセン銀行なるコンビニ銀行の前。泊まっていたコースウェイベイのホテルからは三〇分。二〇年前

下から老人達が何人も登って来る。有名な香港II朝の老人クラブの集会だ。「ジョーサン」と朝の挨拶をすると嬉しそうに「ジョーサン、ジョーサン」と二倍にして答える。道の脇に老人がたかり、てんでにペットボトルを持つ

て湧水を汲んでいる。飲める沸き水も有るのだ。早くも汗だくになった顔を洗った。

舗装道路と別れ、松林の中の山道に入る。道は固く乾いた白い砂地で瀬戸内の島の道と思わせる。このまま山の中に入ってゆくのかと思っているとしばらくして視界が開け、山の斜面をトラバースする。斜面の下には高層アパート群が立ち並び、その最上階はこちらと同じ様な高度だ。山にいるとは言え、景色は一挙に都会。正に香港。

そこから稜線を越えて下ると金山公園。歩き始めて一時間。香港人の大好きなバーベキューの石の釜があちこちにしつらえられ、朝もまだ早いと言うのに数組が場所とりをしている。山越えをしてここまで来たが何のことはない、反対側に車道が有って簡単に入って来れる。本当の山奥と言うのは無い。これまた香港らしい。

こうして最初の山登りが始まったのだが、その日は結局炎天下を六時間ばかり歩かされた。登っては下り、下っては登り。山登りとしては当然のこととは言え、激しい上下だ。しかし、標高三〇〇米を越えると樹林は消え、眺めは絶好。とりわけ大帽山のピークの東側に広がるたおやかなスキケ原は見事だった。これまでもこうした場所には幾度も出かけたはずだが、何にも遮られずにこれだけ一望

の下に眺められるスキケ原は珍しい。

とは言え、道は長く、灼熱の太陽が容赦なく直射する。大帽山直下に現れる舗装道路の急坂でばくは遂に足がつり、ほかのメンバー共々倒れ込んだ。だましまし登り終え、大帽山を回り込むと、西側には午後の日を浴びた山々が紫色にけむってさらに延々と続いていた。

ようよう下り切った公園で飲んだサンミゲール(ビール)は極楽の味と思え、以後これは劇薬に近い麻薬になった。夕食はワンチャイの満興楼なる北京火鍋屋でシャブシャブを食べた。夜は家に戻って「大地の子」のビデオを見て涙を流した。たった一日の山登りと美食とビデオ鑑賞が出来る。これが香港の山登り。共に足がつった連中は当初のぎこちなさはものかわ、一挙に仲間になってしまった。着任一週間目の衝撃的な休日だった。

II 香港山事情

リアス式海岸である香港には平地が少ない。人の住める密集地帯は一〇%に過ぎず、残りは山か不毛な湿地である。しかも山の地味はやせて岩だらけなために、三〇〇米も登れば、樹林は消え、視界は広闊として開け、あたかも雲の平の高原や、黒部五郎の稜線の様な景觀となる。狭いとは言え、香港に山はあるの

だ。たった二本の足で歩く限り、そこは十分に広く、美しい。

初めての山を案内してくれた新潟県人会山岳部(？正式名称は無い)はその日から十一月に開催されるホンコン一〇〇kmの練習を開始したところだった。かつて中島先輩が参加し、我が兄貴も参加した。これ幸いとぼくもそれに乗った。

練習は毎週末、とにかく山をあちらこちらとひたすら歩く。おかげで急速に香港の山に近付き、馴染むことになった。それがもう一年半にわたって続き、ホンコン一〇〇kmには二度も出た(記録は二十七時間三十八分と二十六時間三十八分)。そしてその余勢を駆って、海外遠征も五度に及んだ。一体ぼくは香港に何しに来たのかと思うことが有る。

香港では、漁農処郊野公園管理局なる政府機関により様々な山道が整備され、ていねいな管理がされている。

山道の代表は九竜半島の付け根を東西に縦断し、一〇〇kmにわたって伸びるマックルホーストレイル。一九八一年に、時の総督でハイキング好きのマックルホースの命を受けて整備された。ほぼ一〇kmごとにステイジが分けられ、その両端にタクシーやバスが通る街道があり、一日のんびりしたハイキングには一

二ステイジずつ歩くのがちょうど良い。トレイル上には五〇〇米ごとに位置表示の道標が有り、道に迷う心配も無い。毎年恒例の香港一〇〇kmはこのルートが舞台となる。

それにクロスするかのように香港島南部から本土にわたり、北へと向かう一九九六年一月に完成したばかりの七五kmの道がウィルソントレイル。現在の総督パッテンの先代総督の名前を冠している。新しく造っただけに大分無理が有り、途中香港島のクォリーベイから九龍の藍田まで地下鉄に乗ったり、村の中の道を歩いたりせざるを得ない。しかも坂の殆どはセメントの階段で塗り固められている。しかし、北に向かうほどにワイルドな味わいは高まり、海をほとんど対岸に、密輸で有名な中国の国境の町斜頭角をみはるかすゴール地点には辺境の村に味わいが色濃くたちこめている。

香港島には、島を東西に縦断するホンコントレイル五〇km。これこそ正に香港のトレイルにふさわしく、高層アパートを見下ろし、見上げ、メタリックな道が続く。

西の離島のランタオ島には七〇kmのランタオトレイル。海鮮料理で有名なラマ島には島の発電所が作って寄付したパワートレイル。そして、独立した大きな山塊としては香港の東の端の西貢郊野公園、それに西の端の青山公

園。

以上、イギリス統治がもたらした合計三〇〇kmの隠された遺産により香港の顕著な山はほぼ全てカバーされる。決して狭く小さな山域ではない。

III 香港一〇名山

その山道ぞいに様々な山が有る。どんな山があるのか、以下香港一〇名山のプロフィール（詳細ガイドは別途お問い合わせいただきました）を紹介したい。

1 マックルホーストレイル沿い

①大帽山（九五七米）

香港最高峰。二月には頂上で氷が張ることもある。

飛行機がランタオ島上空からアプローチ態勢に入ると左手に、すもうやぐらの上にピンポン玉をのせた様なリーダーが頂上に立つ、乗鞍に似た悠揚たる山容が現れる。

東側にはスキにおおわれたゆるやかな高原状の起伏が続き、西側にはイロハ坂の様な立派な車道が通じている。ハイカーを楽しませつつかつ、車で来る観光客も受け入れる。最高峰だけに極めておらかな山だ。秋のお月見山行が最高。

②馬鞍山（七〇二米）

南北に並んだ二つのピークがゆるやかな

吊り尾根でつながれ、遠くから見るとまるで馬の鞍の見えるのでこんな名前になった。馬鞍山は南のピーク、北のピークは牛押山と言う。

ところが、海鮮料理で有名な西貢の町から見上げるとこれは突然、富山から見上げる剣岳を彷彿とさせる力強い岩のピラミッドとなる。いや、シャモニから見上げるドリユと言ったっていい（言い過ぎか?）。その南側には、主峰を守る忠実な近衛兵のごとく、九曲山、大金鐘の峰々が肩を寄せ合って聳えている。

そして嬉しいことに、下からでは全く見えないのだが、その近衛兵達の肩の向こう側には昂平なる見事な高原が隠されている。西貢の西の北港と言う村から緑の丘をどこでも良い、登ってゆけばその高原の端に突き上げる。寝っ転がるなり、でんぐり返しをするなり何でも自由な高原だ。そこでパーベキューもしたし、野宿もした。双六平らで遊んでいるような気になった。

香港の山の中で最も力強い景観を保証してくれる所であり、そこへ向かう道はそれぞれに、次に現れる景観を思っ心弾む程に変化が有る。

③草山（六四七米）

香港の山と言うのは原則として剥げ山で

ある。それだけに剥き出しになる山の形と、山肌に生える植物の種類で山の美しさは決まってしまう。

そこで草山である。針山なる正に三角形のトンガリ山を越えるところの山へ続く、ユーカーの並木に覆われたゆるやかな稜線が始まる。針山の炎天ですっかりのぼせてしまった頭を冷やすには最適の木陰だ。そこを抜けると、美女の柔肌の様なゆるやかなスロープに鮮やかな緑の下草が生えた丘が姿を見せる。これこそ草山かと思うがそうではない。本当は草山はもっと先だ。でもいいじゃないか。この一帯全体が草山なのだ。丘の西の肩、つまりは美女のあらわな肩には一本杉ならぬ一本ユーカーが立ち、その横には青空を映した池塘すら有る。ぼくはここでいつも、美女の肩に頭をもたれ、ユーカーの木陰で日をよけながら、冷たいワインでも飲んで遠くの針山、さらには香港島のビクトリアピークを眺めていたいと思う(夢はまだ実現していない)。

ここからさらに舗装道路を登り切ったところがピーク。そこは香港一〇〇kmのほぼ天王山と言える場所。ここを越えて一気に下れば、登りはもう大帽山だけ。完歩できるかどうかの予感が生まれ始める所だ。美しさと苦しさが交錯する、いわば三俣蓮華

だと思っている。

④獅子山(四九五米)

飛行機はビルの上をスレスレにかすめながら滑走路に向かう。その時左側の窓から見える、座っているライオンの様な岩山がこの山だ。とにかくライオンに似ている。ライオンの頬にあたる部分が二ピッチばかりの堂々たる垂壁になっていて、時折苦しみ抜きながら登っているクライマーを見かける。

登ってみれば裏側にしっかりと山道が付いていてライオンの頭に登れる。そこからは大きくバンクしながら滑走路に向かう飛行機が真正面に見えて飽きない。

天気の良い夕方五時過ぎに事務所を出て登り、夕日に染まる香港の町と空港を眺めるのは何か特別の時間を与えられた格別だ。ビクトリアピークも結構だが、これだけ市街地から近く、しかも絶好の眺めが得られる山にも少し観光客を誘致したいものだと言画している。

⑤シャープ・ピーク(四六八米)

香港の槍ヶ岳と言っても良い。どこから見ても鋭い切っ先が天を指している。しかもその北側には雲の平まがいの高原が広がり、南には東鎌を思わせる細い岬が東シナ海へ長々と突き出している。壮絶とさえ言える

海と山のコントラストにあふれる山域だ。

新潟県人会はここがあまりに気に入って、北側の雲の平でキャンプ合宿をしたあげく、麓の村の空き家を借り上げ、それをにわか別荘とした。大浪湾と呼ぶ海岸に夏になるとトップレスのフランス娘が現れると言うのも大きな理由だった。

頂上へは様々なルートが有る。南には岬からのものと海岸からのもの、西には最も



香港の槍ヶ岳 "シャープピーク"

短い道。ただし東と北からのルートは未踏だ。東シナ海から直接のしあがる斜面はあまりに急で四尾根を思わせる様なルートとなっている。

この山を眺める場所と言うのも様々有る。まずは西の西湾山。シャープピークを盟主とする一帯を天国とすれば、その入口に当たる所だ。夏の一夜ここで野宿をして朝を待った。シャープピークの裏側、つまり中国側には雲があふれ、それが峠からこちら側にあふれるように流れ出て来る。そこに朝日が射す。まさに天国の夜明けだった。北に有る島々塔門島からの眺めは、洋上やや左にかしいだ切っ先を見せて、利尻富士そのものだ。西側の肩から見れば、急な稜線の有様が、巨大な鳥がたたんだ翼をやや開いて敵を威嚇している様にも見える。この山を眺めに出かけた回数もう数えられない。香港で最も美しい山と言って良いだろう。

⑥ 鷄公山 (三九九米)

ステージ三のメインイベント、いや香港一〇〇kmのそれと言っても良い。これだけ高度が低いのになぜか。ぼくらはステージ三を地獄と呼んでいる。わずか一〇kmの間に大きな上下が四回も有る。眺めとしてはまるで南アルプス核心部を思わせる様な深々

とした山で申し分ないのだが、途中に逃げ道は無い。

東から向かうと最後にこの山の登りが立ちほだかる。下って、下って、下り切って、この山への登りが始まる。山肌にくぐられたその道筋ははるか遠くの山道からも見える。炎天下を歩きながら、あそこを登るのかと思うと、それだけで気が萎える。しかも登りの道は樹木におおわれていて風が無い。北アルプスの読売新道を思わせると言えは言い過ぎか。

最後の急坂は砂地で滑りやすい。そこをひたすら忍耐して稜線に出ると突然待望の風が吹く。反対側の景色は入り組んだ海岸線の青々とした眺めを真下にして実におおらかだ。苦しみと解放と、高度の低さとものかかわ、このコントラストでこれほどドラマチックな山はほかに無い。

2 ウイルソントレイル沿い

⑦ 黄嶺 (六三九米)

このトレイルは南は陽光降り注ぐ、まさに地中海と呼べるスタンレービーチ間近から始まり、延々と北に伸びて、いささか暗い秘境めいた中国国境にいたる。おかげで途中の景観はそれぞれのステージであまりにも異なり、イメージが集約しにくい。つまり名前を付けてつないでは見たものト

レイルとして一気に歩き抜く魅力は乏しい。その中でこの黄嶺はそのワールドさで他に抜きんでている。九竜から中国のシンセンへと向かう途中、中文大学を過ぎ、トロハーバー沿いになると平らかな湾の向こうにダイヤモンドヘッドの様な山波が現れる。八人の仙人が住むと言う八仙嶺であり、この山はその連なりの中の最高峰だ。

それだけに頂上に辿り着くにはかなりのアルバイトを要する。まず急峻なとりつきが有り、しっかり高度を稼いだあと、薬師岳に見られる様な幅の広い稜線をたどる道が始まる。膝から腰ほどの高さの下草は崗捻なる花木であるが、遠くから見れば正に這松。進むにつれ道は黒部五郎のカールの様な崖の上を行く。カールの底は昔の村で、草に埋もれた段々畑の畦の縞模様が美しい。

黄嶺はその崖の頂点に有る。カールをはさんで支尾根が南に下がり、その向こうにはトロハーバーが午後の陽を浴びて光る。振り返れば国境の向こうの中国の山が雲の上に浮かんで見える。まるで北アルプス核心部を歩く様な気のする山だ。

3 香港トレイル沿い

⑧ ビクトリア・ピーク (五五二米)

この山ばかりは知らない人はいないだろ

う。香港に観光に来た旅行者の実に四五%はここに登ると言う。昨年の数字で言えば五二六万人。と言うことは毎日実に一万四千人が登る。加えて地元の人々が健康登山と称して毎朝登る。ピークの上に住居を構えてすんでいる人は日本総領事を含めXX万人。まさに山は満員である。

多くの家はこの山の北斜面に有る。基礎は標高二五〇米だが三十一階なので窓の標高は三〇〇米以上有る。目の前に鬱蒼たる密林の山肌が広がる。その緑が四季を巡ってかすかに色を変え、霧に隠れては現れ、雨に打たれる。鳥が飛び、蝉が鳴く。

朝ベッドから寝ぼけ眼で山の緑を眺めていると香港にいることは忘れて、まるで霧が峰の山荘にいる様な気になる。これこそ香港山暮らしと称するそのベースだ。

ぼくは時折一時間ほどかけて、この山にマラソンで登って下りて来る。それに丁度良い歩道が縦横に付けられている。とりわけ霧の日には頂上では五米も先も霧にまかれ、冷え冷えとし、まるでスコットランドに出かけた様な気分になる。

4 ランタオトレイル

⑨ランタオピーク（鳳凰山、九三四米）

香港の西にあるランタオ島には、香港一〇高山の内五山が有る。その中でも最も高

く、しかも香港第二の高山がこの山だ。来年四月に開港する新空港チェックラップコック空港からはこの山がヌツと、まるで甲府盆地の先の甲斐駒の様にそそり立っているのが見える。これまでは殆どの旅客が意識などしたことが無い秘境の島、その盟主だったが、これからはこの山が香港への訪問客の強烈な第一印象になることだろう。

東から登るとゆったりした道が続きのびやかな登山が出来るが、西側は一直線の急斜面になっていて、屋外大仏としては世界最大と言われる天壇大仏の異様な姿が見える。通常はこののびやかな道をゆったりと登る。

⑩サンセットピーク（大東山、八六九米）

香港島の二倍の大きさのランタオ島はこのサンセットピークとランタオピークの二つの大きな山が双子の様に並んで出来ている。いわば洋上山脈だ。セントラルからフェリーに乗り、この島に向かうと、下の方に漂う雲から抜きん出て大きな黒々とした山の切っ先が海上に浮かんで見える。およそ、海を渡って山登りに出かけるなどと言うぜいたくは屋久島、あるいは利尻富士の秘境であろうが、ここでは実に手軽に楽しめる。

ランタオピークと同じで東はゆるやか、西は急斜面となっているが、この山の場合

はどういうわけかまず西側の急斜面を登るのが一般になっている。おそらく先に苦勞を済ませて、あとで清水や、天然プールの散在する東側の高原状の道を楽しむと言うのがその狙いだろう。たしかに晴れた日に海上はるか、ビル群の林立する香港島をみはるかしながら、さわやかな高原の中を歩くのはいかにもせいせいする時間だ。どこから見ても香港の日没はこの山の影に落ちる。それがこの山の由来だ。他方、地元の名前はそれと正反対。愛らしい対象である。

以上代表一〇山を紹介した。その内の二山については仲間内で意見が割れた。結果九龍山と青山がもれた。二〇山にすれば素直に全ての好みの山が入りそうである。

都市としての香港の魅力は狭い土地にありつたけのものが詰まっていることにつきる。山もその例にもれない。高度が低いにかかわらず、景観は〇を今一つ足した日本の山に近い。最初の山がそうであった様に、朝七時に家を出て、頂を踏み、スッキリした気分になって街に戻り、美食にありついたらおかげで香港の「何でも有るぞ」のリストが増えた。日本で今はやりの中年登山にとってこれは格好の対象であろう。針葉樹会の仲間としては昨年十一月、西牟田兄

がこの片鱗を経験した。

そして、新潟県人会の連中は今でも毎週末、そこを嬉々として、子供の様に歩き続けている。

IV 香港からの山

九五年十一月の、ぼくとしては初めての100kmが終わったあと、その余勢を駆ってどこか大きな山を登ろうという話になった。山田先輩が「年に一度は大きな山を見なければいけません」と鹿島槍で話されていたこともいつも記憶にあった。

冬で、雪が有って、手頃な所。二月の旧正月の休みに台湾の雪山(三八八六米)に加藤君を含めた有志で出かけることになった。台湾の山は登山許可が必要だが、パスポートの現物を事前に送れなどと妙な要求が有り、台北に駐在している兄の友人の「黙って行けば平気だよ」との助言に乗って、許可もとらずに出かけた。ところが山の中には警察が駐在していて、その目をかすめるためにまるで密入国者になった様な不安を味あわされた。山自体はせっかく持って行ったピッケルもアイゼンも使わず、二月の四千米だというのに丹沢程度の雪しかなく拍子抜けだった。ただし、山の深さそのものはこれだけ小さな国だというのにただ者ではないことを知った。

以後、香港からの海外遠征は一年の間に雪山

を含めて五回に及んだ。地の利、職場の利である。

①雪山(三八八六米)

一九九六年二月十七日～二十一日

台北↓車で六時間↓武陵農場(泊)↓徒歩七時間↓369山荘(泊)↓徒歩往復五時間↓雪山頂上↓徒歩五時間↓武陵農場(泊)↓周辺散策↓車で五時間↓台北

②キナバル山(四一〇一米)

一九九六年六月十四日～十七日

コタキナバル↓車で二時間↓登山登録所↓徒歩七時間でサヤサヤ小屋(泊 三八一〇米)↓徒歩往復二時間半↓ロウズピーク往復↓徒歩五時間↓登山口

有名な山でもあり登山客の受け入れ態勢は完璧。途中の道も小屋もしっかり整備されており、それに必ずガイドが付く。高さに幻惑されて、相当な覚悟で出かけたが丹沢のハイキングの延長と考えて間違いは無い。

ただし、途中のラバンラタ小屋で宿泊出来ればの話で、ぼくらはそこが一杯でその上のサヤサヤなる無人小屋に泊まった。おかげで荷物が増え、身軽な他のパーティーがうらやましかった。荷物が重いと頭痛はひどくなる。

毎年キナバル登山マラソンと言うのが開

催されているが、九五年のトップは男子で往復二時間四十六分十八秒とのこと(ぼくらは九時間半かかった)。見事なジャングル、頂上の、未だに伸び上がりつつある広大な露岩地帯、そこを気軽に走り抜ける。それが出来るし、そうして楽しむのが本来の山だ。

③玉山(三九五二米)

一九九六年一〇月十八日～二十一日

高雄↓鉄道一時間半↓嘉義(泊)↓車で四時間半↓上東埔↓徒歩六時間↓排雲山荘(泊 三五二八米)↓徒歩往復二時間半↓玉山頂上↓徒歩三時間半↓上東埔↓車で三時間↓嘉義↓バスで二時間↓高雄(泊)

ぼくにとって第二回の一〇〇kmが近付き、その訓練を連休を利用してどこか高地でやろうと言うことになった。であれば馴染みの台湾の最高峰と言うことになった。前回は無許可登山で苦労したが今回は正式に、と言うことでツテを頼った。すると何のことはない無いパスポートのコピーだけで許可は出た。ツテの有る無しがこれだけ事態を変ええる。これが気に入らなかった。

秋の快晴の山を期待したが、ひたすら雨に終わり、まるで大学二年の初夏に出かけた秩父縦走とそっくりだった。雪山と同じく森林限界は三六〇〇米。いたずらに森

林が多く、眺望の効く岩礫帯は最後のわず
か数一〇〇米、それも風雨にふさがれてい
た。

下山して、まるでヒッピーの様な姿で歩
き回った高雄の街のすさまじいまでにさび
れた姿の方が印象に深い登山だった。結局
雪山と玉山をへて、台湾の山への興味は消
えた。そこはあまりに森が深く、アルピニ
ズムと言える景観は縁遠かった。その上入
山許可と言う異型なものは大いに感興をそ
いだ。

④ブータン(ティンプルー)プナカ)

一九九六年十二月二十五日～三十一日

香港↓バンコック(泊)↓ドゥルック・
エアにてパロ↓車で三時間↓ティンプルー
(泊)↓車で一時間↓パングリザム↓徒歩
四時間↓シンチュラ(泊)↓徒歩五時間↓
ドプシン・パン(泊)↓徒歩四時間↓チヨ
ルテン・ニグロ(泊)↓徒歩二時間↓ゾム
リントン↓車で一時間↓プナカ↓車で三時
間↓ティンプルー↓車で三時間↓パロ(泊)
↓ドゥルック・エアにてデリー(泊)↓香
港

我が社のデリー支店がブータンの国営航
空会社ドゥルック・エアの総販売代理店を
している。加えて、今では有名な同社の機
内誌の編集までしている。このツテでいつ

かブータンへと思っていた。大体ブータン
は特異な国で、外国人へのビザ発給枠は年
間五〇〇〇人、しかも国内滞在一日一人当
たりUSD一二〇が基本料金として徴収され
る。つまり、ヒッピーがふらりとでかけて
歩き回れる様な世界ではないのだ。年末に
なるとアジア各地からの帰省客のおかげで
飛行機の座席もとりにくくなる。そこを無
理してたのみ五人の枠がとれたので出かけた。

本来は一週間かけてチヨモラリベースま
で行くつもりだったが、ガイド先から雪が
深くて駄目だと言われ、首都ティンプルーか
らプナカへと深い森の山の中を歩く三泊四
日のトレッキングとなった。

結局どこかの山に登ったわけではないが、
ほぼ二〇〇年前の日本を歩く、ひたすら懐
かしさに襲われ続ける貴重な旅だった。キャ
ンプ最後の夜は七〇〇年前に建てられた小
さなチヨルテンをおおう様に茂ったグミシ
ンの巨木の下で、夜を徹して火を焚きチヨ
ルテンを守る村人の一家と過ごした。

⑤玉龍雪山

一九九七年二月四日～九日

香港↓飛行機で昆明(泊)↓飛行機で大
理↓ミニバスで虎跳峡經由八時間↓麗江
(泊)↓ミニバスで周辺散策/千海子、白
水、遊覧リフト(三二〇〇米まで)、白砂

村↓麗江(泊)↓ミニバスで長江第一湾往
復↓大理(泊)↓昆明(泊)↓香港

中村先輩の「ヒマラヤの東」には、この
世にはこんな世界も有ったのかと目がくら
んだ。加藤君が先輩と連絡をとりガイドを
紹介してもらい、旧正月の休暇にこの旅は
実現した。ほんの一かけらでも良いあの本
の中に有る場所を見てみたかった。

奥深い秘境という先入観が強く緊張して
いたが、飛行機が大理まで入り、麗江のホ
テルは正に超近代的ホテルと言うことで旅
は順調過ぎるほどだった。

しかも虎跳峡にはハイヒール姿の観光客
が訪れ、玉龍雪山の麓では観光用のリフト
が敷かれ、登った高みでは少数民族の衣装
をつけたナシ族の可愛い女達が一緒に踊ろ
うと手招きし、お茶代をとる。秘境である
筈の地で思ったのは世界は進むと言う一語
だった。

旧正月の元旦、白砂村から玉龍雪山を眺
めに出かけた。寒さに震えながら待ったが
遂に頂上の雲が晴れることは無かった。し
かし一帯の透徹した寒気と、雪山の圧倒的
な存在感を肌で感じ取れた。今後中村先輩
のあとを追ってどこまで行けるか。次は白
茫雪山が目標である。

以上思い付くままに出かけた山々であるが、どこでもいたく気軽にかけられることに驚く。こちらが勝手に秘境と想像していてもあちらはあちらでそれを資源として生活の糧にすべく日々開発を進め、急速に便利になっていくのである。とりわけ中国では、国内の観光客の動きが激しい。五回の旅でそのことを知った。この八月末にはラ

サに向かい、秘境願望と開発願望の折り合いの観察と言う旅のシリーズの仕上げとするつもりである。結果としてはますます香港の山が気に入る。丹沢には高校生の時代に五十五回出かけたが、香港の山についてはもうこの頻度を越えてしまった。出来れば一〇〇回記念というものをいつか実施したい。

「世界百名山」の選定に関わって

中 島 寛（昭和三十六）

一、老後の楽しみ

先日、と言っても一年以上前になるが、アンデスの仲間が揃って吉沢さんをお訪ねしたことがある。山の話をしつくり伺っておこうというのが趣旨で、それはそれなりに大変楽しく、有意義な会だった。ところが、これは全く個人的なことなのだが、話はずんずん最中に、突然、ふとした拍子に、自分自身が、アンデスの時に親父よりも年上であんな

に怖かった吉沢隊長の当時の年齢を既に上回っており、間もなく還暦を迎えることになる。言う事実が付き、愕然とした。実は、その時のテープを文字化し、記録に残しておきたいと思いつつながら延び延びになり、最近になってようやく纏め上げたのだが、その時の会話をひとつひとつ反芻しながらキーボードを叩いていて、自分の年齢の問題を改めて思い知らされてしまった。吉沢さんは、皆さんよく

ご承知の通り、五八歳の時のアンデス遠征を契機として、山中心の生活を再開されたが、その後、二回に亘ってUIAAの総会に日本代表として参加し、その機会に「世界一周の「山旅」」を通じて世界中の登山家と交流したり、六九歳の時に奥アマゾン探検隊の本部長として南米を訪問、七三歳の時にもK2登山隊の総指揮として五二〇〇米のBCまで出かけている。九三歳の今日も読書、執筆、翻訳に忙しい毎日を送っている。

こういう桁外れの先輩が身近にいと、勇気づけられるのを通り越して、わが身がみじめになってくる。しかし、「老後」は間違いなく足早に迫っている。吉沢さんのような達人の真似は無理としても、どこまで近づけるか。同年代の友達からも毎日のように定年退職して自由の身になったという挨拶状が送られてくる。しかし、あまり幸せそうな雰囲気は伝わってこない。気軽に「人生八十年の時代到来」なんて話しているが、いざ自分の問題になると、定年後の有り余った時間をどう使ったらいいかまるでわからなくなるのが現実のようだ。ただひとつ嬉しいことは、昔の山仲間が最近になってどんどん復活してきたことだ。一〇年前には想像できなかったが、今は、山の計画を作れば、同年代の仲間ですぐにチームが組める。冬山でも変わらない。

このところヒマラヤに通い詰めている日大OBの池田錦重氏によれば、ヒマラヤ八千米峰の場合も同じらしい。今や登山の世界は中高年登山ブームと言われるが、いい時代になったものだ。最近では、装備類も格段によくなったし、交通事情も改善された。ひと昔前には入れなかった地域もどんどん開放されるようになってきたので、丹念に情報を追いかけていけば、思わぬことが可能になる。中高年パワーを発揮できる環境が急速に拡大されるようになった。われわれの間である中村保さんはこういった変化をフルに活用して行動半径を広げているのは皆さんご承知の通りだ。私もいつまでも忙しがっているのではなく、早く今の仕事の目鼻をつけて、もっと思いっきり山登りを楽しみたい。まだ二、三年は無理だろうが、今のうちにやれることはやっておきたい。少なくとも、自分なりの山登りの楽しみ方は見極めておきたいと思うようになってきた。夢が夢で終わってしまうかも知れない。しかし、夢を描いてみなければ何事も始まらない。

第一に思ったのは、何とか登れるうちに未登峰を探してチャレンジしてみたいということである。パイオニア・ワークの時代は終わったと言われる久しい。今や八千米峰はもとより七千米峰でも未登の山はほとんどない（ちなみに、別表の「いろいろな世界百名山」に登場する二百四十座の中でもっとも高い未登峰はブータン、中国国境のガンカール・プンスム（七五四一米）である）。しかし、五、六千米級の山なら魅力的な山や地域はいくらでも残されている。先日当会で偵察隊を出したミャンマーのカカボラジ（五八九一米）もそのひとつだが、カカボラジの北側、中国の雲南省の南には氷河を従えた多数の素晴らしい未登の山々が連なっていることは、中村さんが紹介してくれている。最近登山を再開した多くの人のとって、「学生時代のような激しい登山はもうできない。技術的にもその後の進歩に学ぶ機会が無かったばかりか、あの頃身につけたものさえかなり忘れてしまった。つまり「再開」したとはいえず、これは「登山」というより「山歩き」であり、山を舞台にした旅というべきだろう」（本多勝一「五十歳から再開した山歩き」といった感懐がもっとも身近に感じられるだろう。別に背伸びをする必要はない。山登りは楽しむのが一番だ。しかし、われわれが学生時代からずっと先輩達に言われ続けてきたように、山登りは年相応に一生続けていきたい。そして、山屋の性は結局のところ未踏の地、未登の山に憧れ、こだわるものだという考えに帰着する。この点は年齢に関係ない。気のあった者同士であり肩肘張らずに未登の山に出かけられたら最高だ。若かった時のようにただがむしゃら

に登るだけでなく、辺境の人々の生活に触れ、時間の余裕を活かして一緒に生活するようなこともしてみたいものだ。

第二は、もし機会があれば、もう一度八千米峰を試みてみたいということである。八千米峰を目指すとするれば、自分自身の実力（体力も含めて）が最大の問題だが、もう一つ大事なのはかなり長期間浮き世のしがらみから自由になれるかどうかということである。その点、定職をもたない身になれば大変有利だ。年甲斐もなく身の程知らずと言われそうだが、むしろ酸素を有効に使って着実に八千米峰の頂上に立ってみたら、自分なりに新しい世界が開けるような気がする。但し、どの山も登山許可が必要だし、入山料もべらぼうに高くなっていくので、チャンスを見つけたのは苦勞しそうだ。八千米峰ツアーも結構数多く組織されているようだが、あまり気が進まない。

第三は、登る楽しみだけでなく、山を眺める楽しみもあるわけで、その対象として、日本の外に目を向けてみたいということだ。例えば、「世界百名山」を自分で選んで、あるいは選ぶつもりで、世界の山々を歴訪してみたらどうだろうか。深田久弥さんの「日本百名山」は名著だし、いろいろな山の紹介を通じて深田さんの登山観を知り、日本の山の特色や良さをしみじみと理解できる。しかし、

今日のように、この本が中高年登山者のバイブルのような存在になり、深田さんが選んだ深田百名山を登ること自体がブームになり、多くの人達の生きがいになったりすると、戸惑いの方が先に立ち、とてもついていけない。一方、昨年の重広恒夫さんのように一気に全百座を百二十三日で踏破したなんて話を聞くと、白けてしまう。深田さんの本当の気持ち、山登りは個人の楽しみであり、山の良悪、好き嫌いの尺度は人それぞれの心の中にあるものだし、この本を下敷きにして一人一人の「自分だけの日本百名山」を探して欲しいということだと思いが、ブームというものは恐ろしい。「日本百名山」は現代の札所巡りと考えれば分かりやすい、と言った人がいたが、百座を踏破するとポックリ亡くなる人が多いので、三つ四つ残して打ち止めにするやり方が増えていると言う話を聞くと、寒々とした気分になってしまふ。

「日本百名山」の不幸は、どの山にも誰もが簡単にアクセス出来る、少なくとも出来そうに見えることだという気がする。深田さんは「日本百名山」を書くにあたって、百座を全て自分の足で頂上に立った山の中から選んだ。「登ってみもしないで選定するのは、入社試験に履歴書だけで採否を決定するようなもので、私の好まないところであった」と、

「後記」に書いている。それだけに、百名山の基準として第一に掲げられた「山格のある山」という言葉には重みがある。しかし、舞台を日本から世界に広げた場合には事情が違って来る。どんなに世界中を股に掛けて登りまくっても、登れる山はせいぜい二〇〇〜三〇〇位が限度だろうし、百山を選定するとすれば、結局、写真や文献を参考にせざるを得ない。そのかわり、将来登ってみたい、眺めるだけでも訪ねてみたい山々を折り込んで自分の夢を託すことができる。歴史や地理も勉強し直さなければならぬが、自分なりの夢を描けるのは素晴らしい。深田さん自身も、次は「世界百名山」を手掛けるつもりで、一九七〇年に「岳人」誌に連載を始めたが、翌年の三月、茅ヶ岳で急逝されたため、四一座まで中断のやむなきに至った。

二、ともかく「世界百名山」を選んでみる

あれこれ将来のことに思いを巡らせているところに、旧知の一方英夫さん（慶応大学山岳部OB）から電話がかかってきた。昨年の十一月のことだ。一力さんは朝日新聞社の取締役を退任し、朝日旅行社の社長に就任したところだった。これまでは国内旅行專業だったが、来年から海外旅行企画を始めたい。山や辺境関係のツアーもどしどしやりたい。ついでには景気づけに「世界百名山」を選定する

ので協力してもらいたい、ということだった。私にとっては渡りに舟だった。選考委員としては、私の他に、小倉茂暉／董子夫妻、尾上昇、風見武秀、川嶋保幸、杉田博、高橋和之／通子夫妻、増田昌士、宮下秀樹、宮原 巍、貫田宗男、牧潤一、一力英夫といった錚々たる方々が名を連ねていた。こうなると、役目上、自分の遊び心ばかりを押し出すのは気が引けたが、かえって心おきなく自己流の絵を描いてみる良い機会かも知れないと思った。

今日までに、七千米峰だけをとっても二百六十座以上の登頂が記録されている。八千米峰でも新ルートがどんどん開かれて、複数のルートから登られる時代になった。中国側からのヒマラヤ、カラコルム高峰へのアクセスも次第に開放され、情報量も増えた。従って、最初は「選ぶ楽しみ」を十分に堪能出来るのではないかと思ったが、いざ作業を始めると、難行苦行だった。まず、貫田さんが準備してくれた世界の山三一〇座（アジア一七八座、ヨーロッパ五七座、アフリカ六座、北米三四座、南米二四座、オセアニア・南極十座）を基礎に、出来るだけひとつひとつの山の写真を探し、地図と首っ引きで登山史を辿り、最近訪れた登山家やトレッカーの記録を読む作業を繰り返していったが、いつも自分の無知と勉強不足を痛感させられた。それ

でも、毎日が楽しかった。行き帰りの車の中や昼休みなどちょっと時間が空けば、いつでも、地図と写真集を眺めていた。

倉知君から借りたW.Noyceの“World Atlas of Mountaineering”（一九六九）は世界全体の主要な山の概要をバランスよく把握するのに便利だった。メイスンの「ヒマラヤ」（望月・田辺訳）や深田さんの「ヒマラヤの高峰」もヒマラヤ・カラコルムの山々とその登山史を理解するのに不可欠の文献で、再読した。最近のものでは、Jill Neate女史の“High Aspiration”（一九八九）が大いに有益だった。地図では、これまでに集めてきたものをフル動員したが、「世界山岳地図集成」（学習研究社刊）を大いに利用した。白籟史朗さん、内田良平さん、藤田弘基さん等よく知っている写真家の人達の素晴らしい写真集が沢山出版されていることも改めて知り、参考にさせてもらった。百名山と言うと、「百」という数字のために俗っぽくなるし、また、「名山」という言い方が、山の格付けを行い、お墨付きを与えるような印象を与えがちで、胡散臭い感じがついてまわる。せめて選定基準を明確にする必要があると考え、私としては次の五つを基準とした。

(1) 深田さんが「日本百名山」選定にあたって挙げた「山の品格」、或いは「山格」のある山を重視すること。雄大さ、荘厳さ、美

しさ、鋭さと言ったさまざまな要素が醸し出す独自の存在感を大事にしたいと思った。

(2) 「山高きが故に貴からず」だが、世界の山を対象にする場合には山の高さを十分に考慮する必要があると考えた。

(3) 山とその周囲に住んでいる人々との歴史的、文化的な結びつきの深さに目を向けること。

例えば、カイラス、ナムナニ、マチャプチャレ、梅里雪山のような信仰の対象となっている山々はどれもさすがに素晴らしい。

(4) 登山史の面で重要な役割を果たしたものをよく確かめること。例えば、戦前の最高登頂峰であったナンダデヴィ、一時は世界最高峰と見なされていたガウリサンカール、人喰い山と恐れられながら多くの人を惹きつけ、犠牲を要求したダウラギリ四峰、アンデスでの華々しい初登攀争いの舞台となったチャクララフ等。現在注目されている、あるいはこれから新しいルートの開拓が期待される、といった今日の視点も出来るだけ加味した。

(5) 地域的なバランス。ヒマラヤ・カラコルムにどうしても偏りがちだが、他の地域にもその地域特有の環境があり、山の個性があることに配慮した。

しかし、百に絞り込むことは大変な作業だった。そもそも無理な話なのかも知れない。七

十までは加点主義で選べるのでそれほどの苦労はないが、残りの三十は減点主義で削り落としていかなければならぬのできつかった。まるで、長年の友人を見限るようになつたが伴った。「選ぶ楽しみ」のつもりが「選ぶ苦しみ」を味わうことになってしまったが、後から考えればそれも当たり前だ。

それでも、なんとか百名山を選定したものが別表のF欄である。アジア五三座、ヨーロッパ十七座、アフリカ三座、北米十二座、南米十一座、オセアニア・南極四座の合計一〇〇座になった。日本の山では富士山だけを入れた。深田さんは阿蘇山を入れたと言っていたが、私はむしろ穂高岳、槍ヶ岳、剣岳等昔から慣れ親しんだ山々を加えたかったが、ヒマラヤやヨーロッパ、アンデスの山々とのバランス上割愛せざるを得なかった。最後はエイヤッだった。正直なところ自信がない。試案の域を出ない。しかし、今後の議論のためにあえて紹介しておくこととした。十五人の選定結果をまとめたA欄と比較すると、私の選んだ百座のうち六十六座しか含まれていないが、朝日旅行会としても今後の旅行企画に折り込むことを狙っている。アプローチが容易な山や観光的に有名な山を沢山選んでいるのに、私はそのへんの商業的な視点はまるで配慮しなかった。やむを得ない結果である。

三、いろいろな「世界百名山」

今回の作業をやってよくわかったのは、今の私には、未だ、どんな形であれ「世界百名山」を選ぶ資格はなく、荷が重すぎたということである。しかし、自分なりに夢を描くという意味では大いに成果があった。少なくとも、良い刺激になった。「世界百名山」リストはこれまで無いものと決め込んでいたが、権威のあるなしは別にして、深田さんが四十一座で中断のやむなきに至ったものを含めて、全部で五つのリストが存在することがわかった。しかし、それらを比較してみると、たった五種類なのに、よくもこれだけの違いが出てくるのだとびっくりする。五つのリストに含まれた全ての山の数を合計したら二三四座になった。想像力を働かせ、主観に頼るのだから、当然と言えば当然である。だが、違いをもたらす要因の大半は情報の少なさであろう。従って、今後の問題は、断片的な情報を寄せ集めて繋ぎ合わせ、いろいろな角度から議論をし、判断の基準となる情報のレベルをより高めていくことだろう。五つのリストの詳細は別表の通りだが、紙幅の都合上、地域別に山名、標高を載せるだけに止めざるを得なかった。

念のために、五つの「世界百名山」リストの出所を記すと次の通りである。

(1) 朝日旅行会が選定したもの（一九九七年二月二六日付「朝日旅行」紙、「日刊スポーツ」紙に発表）。

(2) 「白川義員世界名山撮影プロジェクト1997〜2000」を支援する会（吉田宏会長、伊丹紹泰事務局長以下二十六名）と「世界百名山選考委員会」（クリス・ボニントン、クルト・ディームベルガー、王富洲、モーリス・エルゾーク、エドモンド・ヒラリー、ハリッシュ・カパディア、エドアルド・ミスロフスキー、アール・リード、ナジール・サビル、パルテンバ・シエルパ、重広恒夫の十一ヶ国十一名）が選定したものの（一九九七年一月十一日付「朝日新聞」(夕刊)、一九九七年二月号の「岳人」誌に掲載）。将来の絞り込みを考慮に入れて百十座を選定。

(3) 探検家の黒田洋一郎氏が「山と溪谷」別冊の「ポカラ」誌（一九九六年秋・冬号）に寄稿した「世界百名山に遊ぶ」という文章に載せたもの。

(4) アメリカの登山家、登山研究家のジェイムズ・ラムゼイ・アルマン氏が著書「The Age of Mountaineering」（一九五四）の付録に載せたもの（このリストは一九六九年十一月発行の「毎日グラフ」増刊号にも掲載された）。

(5) 深田久弥氏が「岳人」誌に一九七〇年一月号から一九七一年四月号まで連載し、その後、「世界百名山」（一九七三年十一月、新潮社刊）として出版されたもの。著者が一九七三年三月、茅ヶ岳で急逝したため、四一座までで中断された。

ひとつひとつを細かく見ていくと、反論したい選択も沢山あり、詮索すればきりが無い。アルマン氏のもの是一九五四年に作られたリストなので、情報量の制約もあり、やむを得ないところはある。それにしても、ヨーロッパ・アルプスの著名な山々が軒並み含まれており、ヨーロッパから三〇座というのはいかにも臍負が勝ち過ぎている。黒田氏という人はよく知らないが、熱帯の高山が好きらしく、アフリカから一三座選んでいるが、ほとんど私が初めて聞く名前だ。私の無知によることも知れないが、これもバランスを欠いていると言わざるを得ない。しかし、今は批判は慎みたい。私の分も含めて原資料をそのまま提出して、関心を持つ人がどんどん自分の意見を出して戴く段階と思うからである。私自身は、仕事を離れ、時間がとれるようになったら、大いに山を楽しみながら、いつかは改めて自分の「世界百名山」作りに本格的に挑戦してみたい。

いろいろな世界百名山

山名	標高(m)	A	B	C	D	E	F
＜アジア＞							
エヴェレスト	8,848	*	*	*	*		*
K2	8,611	*	*	*	*	*	*
カンチェンジュンガ	8,586	*	*	*	*		*
ローツェ	8,516		*		*		*
マカルー	8,463	*	*		*	*	*
チョー・オユー	8,201	*	*		*		*
ダウラギリ1峰	8,167	*	*	*	*		*
マナスル	8,163	*	*	*	*		*
ナンガ・パルパット	8,125	*	*	*	*	*	*
アンナプルナ1峰	8,091	*	*	*	*		*
ガッシャーブルム1峰	8,068	*	*		*		*
ブロードピーク	8,051	*	*		*		*
ガッシャーブルム2峰	8,035	*	*		*		*
シシャ・パンマ	8,012		*		*		*
ガッシャーブルム4峰	7,980		*				*
アンナプルナ2峰	7,937		*				*
ギャチュンカン	7,922		*				*
ヒマルチュリ	7,893		*				*
ディステギルサール	7,885		*				*
P29	7,835						*
マッシャーブルム	7,821	*	*		*		*
ナンダ・デヴィ	7,817	*	*	*	*	*	*
ラカボシ	7,787	*	*				
バトゥラ1峰	7,785		*				
ナムチャ・バルワ	7,756	*	*	*			*
カメット	7,756		*		*		*
サルトロ・カンリ	7,742		*				*
トリヴォール	7,728		*				
コングール	7,719		*				*
ジャヌー	7,710		*			*	*
ティリチ・ミール	7,699	*	*	*	*	*	*
ナムナニ	7,694		*				*
サセール・カンリ	7,672		*				
ダウラギリ4峰	7,661		*				*
チョゴリザ	7,654	*	*				
キンヤン・キッシュ	7,582		*				
ミニヤ・コンカ	7,556	*	*	*	*	*	*
クーラ・カンリ	7,554	*	*				*
ムスターグ・アタ	7,546	*	*	*	*		
ガンカール・プンスム	7,541		*				*
マモストン・カンリ	7,526		*				
コムニズム	7,495	*	*	*	*		*
ノシャック	7,492		*				
ジョンソン・ピーク	7,483				*		
マルビティン	7,458		*				
ポベータ	7,439	*	*				*
ハラモシュ	7,409		*				
ガネッシュ・ヒマール	7,408						*
リモ	7,385		*				
チャムラン	7,319		*				
チョモラーリ	7,314	*	*	*		*	*
ギャラペリ	7,295		*				
バインタ・ブラック	7,285		*				
ムスターグ・タワー	7,273		*		*	*	*
ディラン	7,257	*					
バルトロ・カンリ	7,240		*				
ランタン・リルン	7,225	*	*				*
メンルンツェ	7,181		*				*
プモ・リ	7,161		*				
アムネ・マチン	7,160	*		*	*		
ガウリサンカール	7,144	*	*				*
ヌン	7,135		*				
レーニン	7,134	*	*			*	
アピ	7,132		*				*

トリスル	7,120		*		*		
サトパント	7,075		*				
サイパル	7,031		*				
スパンティーク	7,027		*				
ハン・テングリ	6,995	*	*	*		*	
マチャプチャレ	6,993	*	*				*
ドルジェ・ラクパ	6,966		*				
シニオルチュー	6,887	*	*	*		*	*
チャンガバン	6,864		*				
アマ・ダブラム	6,812	*	*			*	*
ジチュ・ダケ	6,809		*				
梅里雪山	6,740	*					*
カイラス	6,656	*	*	*		*	*
ニルカント	6,596		*			*	
シブリン	6,543		*				
シラー	6,400					*	
トランゴ・タワー	6,294		*				
四姑娘山	6,250	*					
カカボラジ	5,891			*			
ミール・サミール	5,809			*		*	
ダマーバンド	5,601	*	*	*	*	*	*
玉竜雪山	5,596			*			
ボゴダ	5,445	*					
カルステンツ・ピーク	5,030	*	*	*		*	*
クリチェフスカヤ	4,750	*		*	*		
ウシュバ	4,710		*		*		*
フィティン	4,374	*		*			
キナバル	4,101	*		*	*	*	*
玉山	3,997	*		*			*
雪山	3,884	*					
ケリンチ	3,805			*			
富士山	3,776	*	*	*	*	*	*
ハドゥール・シェイブ	3,760			*			
リンジャニ	3,726	*					
スメル	3,676			*			
穂高・槍ヶ岳	3,190	*					
峨眉山	3,099	*		*			
アポ	2,954	*		*			
白頭山	2,744	*	*	*		*	
ドタベッタ	2,636			*			
ニョクリン	2,598			*			
インタノン	2,595			*			
スリ・パダスタナヤ	2,243			*			
ハンラ山	1,950	*					
黄山	1,841	*		*			
阿蘇山	1,592		*				
泰山	1,524			*			
小計		52	80	40	31	20	53
＜ヨーロッパ＞							
エルブルース	5,642		*	*	*	*	*
ディフタウ	5,198				*		
コシュタタウ	5,145				*		
アララット	5,165	*	*	*	*	*	*
カズベック	5,047					*	
モンブラン	4,807	*	*	*	*	*	*
モンテ・ローザ	4,634	*		*	*	*	*
ドーム	4,554				*		
リスカム	4,538				*		
ヴァイスホルン	4,505	*	*		*	*	*
マッターホルン	4,477	*	*	*	*	*	*
テッシュホルン	4,481				*		
ダン・ブランシュ	4,283				*		
グラン・コンパン	4,319				*		
フィンスターアールホルン	4,273				*	*	*
グランド・ジョラス	4,208	*	*		*	*	*
ユングフラウ	4,158	*		*	*	*	*
エギーユ・ヴェルト	4,122	*			*	*	*

メンヒ	4,104				*		
シュレックホルン	4,080				*	*	
オーベルガーベルホルン	4,074				*		
ピッツ・ベルニナ	4,049						*
ダン・デュ・ジェアン	4,009						*
ラ・メージュ	3,983			*			
アイガー	3,970	*	*		*		*
オルトラー	3,902				*		
グロスグロックナー	3,797	*		*			
ヴェッターホルン	3,703				*		
ワトキンス峰	3,700				*		*
ムルアセン	3,482			*			
フォーレル	3,383				*		
アネット山	3,355			*			*
ペルディード	3,353	*					
マルモラーダ	3,344			*		*	*
エトナ	3,323			*	*		
ピッツ・パディレ	3,308						*
ツークシュピッツェ	2,963	*		*			
オリンポス	2,917	*		*	*	*	
ゲルラホヴスキー	2,663			*			
ドゥルミトル	2,522			*			
ガルヘビゲン	2,468			*			
スカガステール山	2,405						
モン・テグィーユ	2,134				*		
ケブネカイゼ	2,117			*			
ベン・ネヴィス	1,343	*		*	*		
ベスヴィオス	1,277	*			*		
小計		15	7	19	30	8	17
＜アフリカ＞							
キリマンジャロ	5,895	*	*	*	*	*	*
ケニア	5,199	*	*	*	*		*
ルウェンゾリ	5,110	*	*	*	*	*	*
ラス・ダシャン	4,620			*			
ツブカル	4,165	*		*			
モンゴマ・ロバ	4,070			*			
テイデ峰	3,717			*			
タバナ・ヌトレンヤナ	3,482			*			
ニーラゴンゴ	3,470			*			
エミ・クーシ	3,415			*			
マロモコトロ	2,876			*			
イニャンガニ	2,592			*			
シナイ	2,285	*	*	*			
テーブルマウンテン	1,087	*					
小計		6	4	13	3	2	3
＜北アメリカ＞							
マッキンリー	6,190	*	*	*	*		*
ローガン	6,050	*	*	*	*	*	*
オリサバ	5,699				*		
セントエライアス	5,488				*	*	*
ポボカテペトル	5,452	*		*	*	*	*
フォレイカー	5,304		*		*		
ルカーニア	5,227				*		
ブラックバーン	4,996						*
フェアウェザー	4,663				*		*
ユニヴァシティ・ピーク	4,572				*		
ハンター	4,442		*		*		
ホイットニー	4,418	*		*	*		*
エルバート	4,399			*			

レイニア	4,392	*		*	*	*	*
ロングス・ピーク	4,345				*		
タフムルコ山	4,210			*			
グランド・ティトン	4,195	*			*		
ウォディントン	4,042				*		*
ロブソン	3,954	*	*	*	*	*	*
デボラ	3,822				*		
チリボ	3,820			*			
アッシニボイン	3,619	*	*				*
ダルテ峰	3,175			*			
ハーフ・ドーム	2,698	*					*
ミッチェル山	2,037			*			
ワシントン	1,917				*		
小計		9	6	11	18	4	12
＜南アメリカ＞							
アコンカグア	6,960	*	*	*	*	*	*
ツブングト	6,797				*		
ワスカラン	6,768	*	*	*	*	*	*
イエルパハ	6,634	*	*		*		*
サハマ	6,530				*		
イリマニ	6,480	*			*		*
アウサンガテ	6,384			*			
イヤンプー	6,362			*			
チンボラソ	6,310	*	*	*	*	*	*
サルカンタイ	6,271	*	*		*		*
ヒリシャンカ	6,126		*		*		*
チャクララフ	6,112	*	*		*		*
コトパクシ	5,978				*		
アルパマーヨ	5,947	*	*			*	*
リカンカブル	5,921	*					
クリストバル・コロン峰	5,775			*			
ワガルンチョ	5,749				*		
イリニッサ山	5,305			*			
ポリーバル峰	5,007			*			
フィッツロイ	3,375	*	*				*
パイネ・グランデ	3,050	*	*	*		*	*
セロ・トーレ	3,020		*				
バンディラ	2,890			*			
ロライマ	2,772	*		*			
オソルノ山	2,660			*			
小計		12	11	12	12	5	11
＜オセアニア・南極＞							
ヴィンソン・マシフ	5,140	*	*	*			*
タイリー	4,965						*
ウイルヘルム	4,508	*		*			
マーカム	4,350				*		
マウナ・ケア	4,206	*			*		*
マウナ・ロア	4,168				*		
エレブス	3,795				*	*	
クック	3,764	*	*	*	*	*	*
ハレアカラ	3,055			*			
エグモント	2,518	*					
コジアスコ	2,228	*			*		
エアーズ・ロック	867			*			
小計		6	2	5	6	2	4
合計		100	110	100	100	41	100

(註) 1. 山名は各地域別に標高順に並べてある。

2. A～Fは各「世界百名山」リストの符号。

A: 朝日旅行会

B: 白川義員撮影プロジェクト

C: 黒田洋一郎

D: J. R. Ullman

F: 中島 寛 (Aの選考委員として)

3. カフカズの山名については、深田「世界百名山」の指摘に従い、エルブルーズ、ディフ・タウ、コシュタン・タウは主稜線の北に存在するためヨーロッパに、ウシュバは南に存在するためアジアに入れてある。

4. カルステンツ・ピークとウイルヘルム峰はともにニューギニア島に存在するが、前者はインドネシア領のためアジアに、後者はパプア・ニューギニア領のためオセアニア・南極に入れてある。

5. マウナ・ケア、マウナ・ロア、ハレアカラは、いずれもアメリカ合衆国に属するが、位置からみてオセアニア・南極に含めてある。

会員集会短報

(会員諸氏の集まりがありましたら簡単な内容で結構ですので、是非とも会報幹事迄お知らせ下さい。会員相互の情報交換の場としたく考えております。ご協力宜しく願います。)

赤坂「みね」での集まり

とき…平成九年四月十八日(金)

場所…「みね」赤坂六丁目五七丸源ビル

電話〇三―三五〇五―一九八七

集会メンバー：針葉樹会有志

中島 寛、有賀 盈、倉知 敬、高橋信成、
蛭川隆夫、名和泰三、竹中 彰、村上泰介、
本間 浩、長沢道彦、小島和人、小野 肇、
半場三雄、三森茂充(十四名)

インターネットの威力は凄い。小野 肇君が札幌から東京に転勤するという情報を広島でキャッチした村上泰介さんから電話が入り、この集まりを持つことになった。

去年四月本間さんの快気祝いと称して、有志が新宿に集まって以来の話で、要するに何かのダシを待っていたという次第。

山の話題もさる事ながら、仕事、健康、身の振り方など諸々、皆元気で何より、カラ元

気もあるけれど。それにしても、最も忙しい現役の世代を自負する面々が一〇日前の急な連絡でよく集まったものです。

「みね」は針葉樹会のメンバーにとって、場所も便利でとても居心地が良い。特別料金でもあるし、何より好きな酒が飲める。難をいえば、いい年になったわれわれに、少々脂こすぎるツマミが多いことか。これとて前もって注文を付けておけば良い。

希望があればいつでも企画しますので、また「みね」に集まりましょう。

(三森 記)

編集後記

今夏は西日本各地に被害をもたらせた豪雨と、また関東地区での空前とも思える猛暑で始まりましたが、会員の皆様も色々夏山登山を計画されたり、また、既に何か所か登られた方もいらっしゃるかと思います。

岩崎さんとは何年か前の会の懇親山行で一緒させて頂き、初夏の奥多摩の山頂でビールで乾杯したことが(その時の写真が手元にあることもあって)懐かしく感じられます。ご冥福をお祈りいたします。

本会報より会員の皆様の小集会の模様を載せて行きたく思い、先ずは三森先輩に寄稿願いました。できれば、今後も会員相互の近況を知り合う一助となればと願っておりますので、皆様のご投稿を改めてお願いいたします。

